

富里4遺跡

-厚真町防災施設整備事業 北部防災拠点施設建設
埋蔵文化財発掘調査報告書-

2022.3

厚真町教育委員会

カラー図版



1. 調査地点近景（空撮）S →



2. III F-01検出 W →

序 文

厚真町は約 14,500 年前の旧石器時代の遺跡も発見されており、以降、縄文時代から先住民族アイヌ、現在のわれわれに至るまで、連綿と続く歴史がある町です。

現在は北海道屈指の豊かな水田地帯を有する田園のまちで、平成 30 年 4 月からは厚幌ダム、厚幌導水路の供用が始まり、本町農業のさらなる発展に向け、町全体が新たな段階へ動き出していました。しかし、その年の 9 月 6 日に発生した北海道胆振東部地震は厚真町の山々や豊かな田園風景を一変させる甚大な被害をもたらし、尊い 37 人の命が奪われました。

厚真はこれまでも洪水や地震など、いくつもの自然災害を乗り越えてきた歴史があります。今を生きる私たちも皆様のお力添えのもと、この難局を乗り越えるべく、復旧・復興に向けた日々を一步一步着実に進んでおります。

本書は、こうした災害からの復興に向けた、富里地区の防災拠点施設建設に伴う富里4遺跡発掘調査の成果を収めたものです。調査結果から、約 2,800 年前の縄文時代晩期を主体として、アイヌの人々が自然と共に暮らしていた時代に至るまでの痕跡が見つかり、それらを収録いたしました。

本調査・報告にあたり御指導御支援を賜りました関係諸氏並びに関係機関に厚く感謝申し上げますとともに、本書が今後の埋蔵文化財の保護や調査研究の一助なれば、幸いに存じます。

令和 4 年 3 月

厚真町教育委員会 教育長 遠藤 秀明

例言

1. 本書は、令和3年度に行った厚真町防災施設整備事業 北部防災拠点施設建設に伴い発掘調査された富里4遺跡（登録番号：J-13-150）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、厚真町役場の委託を株式会社シン技術コンサルが受託し、整理業務を厚真町教育委員会が行った。
3. 調査・整理（分担）は以下の体制で行った。
 調査担当者：乾 哲也・奈良智法（厚真町教育委員会）
 ：工藤 肇（発掘：（株）シン技術コンサル派遣、整理：厚真町公務協力者）
 発掘作業員：9名
 整理作業員：3名
 工藤：遺物接合作業・土器写真撮影
 奈良：Ⅲ・Ⅴ層遺構図・写真図版・各種一覧表
 乾：Ⅲ・Ⅴ層出土遺物分類・実測指導・フローテーション試料選別・各種調整業務
4. 本書の編集は乾・奈良の協力を得て工藤が行い、Ⅰ章は乾・奈良が執筆し、Ⅱ～Ⅳ章を工藤が執筆した。各節の執筆は文末に記す。
5. 関連諸科学の同定分析については、以下の機関および個人に依頼した。
 - ・AMS法 14C年代測定：株式会社 パレオ・ラボ
 - ・動物遺存体同定：高橋 理（札幌大学非常勤講師）
 - ・炭化種子同定：北海道大学大学院文学研究院 高瀬克範
6. 剥片石器・礫石器の実測及び土器の拓本作成・断面実測を株式会社シン技術コンサルに委託した。
7. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会軽舞遺跡調査整理事務所で保管している。
8. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂き、記して感謝申し上げます。
 北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、厚真アイヌ協会、苫小牧アイヌ協会、厚真町富里自治会・高丘自治会、（株）佐藤組、（株）尾崎測量設計事務所
 赤井文人、赤石慎三、阿部明義、新家水奈、犬飼仙松、内田和典、岡橋厚子、工藤研治、佐藤一夫、富田啓貴、中田裕香、中山文雄、長沼 孝、西脇対名夫、広田良成、藤原秀樹、宗像公司、村本周三、柳瀬由佳

凡例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号等を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。
 [遺構] 焼土：F 杭跡：KP 土器集中：PB フレイク・チップ集中：FCB 炭化物集中：CB
 [遺物] 土器：P（縄文土器：JP） 剥片石器：FT 礫石器：ST 礫：S
 フレイク・チップ：FC（黒曜石・頁岩製） 石斧石器群削片：SFC（緑色泥岩・片岩製） 陶磁器：CP
 ガラス製品：GP
 [計測値] 本文・一覧表中の計測値に（ ）を付記したものは現存値を記載。

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕 樽前 b 降下軽石 : Ta-b 白頭山-苫小牧火山灰 : B-Tm

樽前 c 砂質降下軽石 : Ta-c

樽前 d1 細礫質降下スコリア : Ta-d1 樽前 d2 中礫質降下軽石 : Ta-d2

恵庭岳 a 降下軽石 : En-a 黄褐色粘土質シルト (いわゆるローム) : L

〔色調〕 小山・竹原編著 (1994) 『新版 標準土色帳』に従った。

〔注記〕 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については () 内に粒径 (単位 : mm)、状態を記載した。

混入土の比率

A + B : A と B が同量比混じる A-B : A を主体に B が多量に混じる

A = B : A を主体に B が少量 A≡B : A を主体に B が微量

φ : 粒径 (単位 : mm) ↓ : 以下 (状態) : 斑状に混じる・均一に混じる

〔層位〕 標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、本文・一覧表等には下記の略号を用いている。

U : 上位 M : 中位 L : 下位

〔焼土・炭化物集中〕 被熱による土壌赤色化の度合い等の表現に以下のトーンを用いた。



3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

基本土層 : 1/20 遺構周辺図 : 1/40 柱穴 1/20 焼土・炭化物集中 1/20

集中遺物 : 1/20・1/40・1/50 土器拓影図 : 1/3 剥片石器 : 2/3 礫石器実測図 : 1/3

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

〔線種〕 ----- : 攪乱 - - - - - : 根痕

5. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

〔断面〕 V-----V : たたき痕 |-----| : 擦り痕・滑沢面

〔平面〕 □ : 滑沢面範囲

6. 一覧表中の石材については乾・工藤が肉眼観察で分類した。

頁岩・泥岩の分類については、粒度による基準ではなく、肉眼観察によるものである。

Aga. : メノウ Bs. : 玄武岩 Cha. : チャート Gr-Mud. : 緑色泥岩 Mud. : 泥岩 Obs. : 黒曜石

Sa. : 砂岩 Tu. : 凝灰岩

本文目次

カラー図版

- 1 調査地点近景（空撮）
- 2 III F-01 検出

序 文
例 言
凡 例

第I章 調査の概要

- 第1節 調査要項と体制 …………… 1
 1. 調査要項 …………… 1
 2. 調査体制 …………… 1
- 第2節 調査に至る経緯 …………… 1
 1. 発掘調査に至る経緯 …………… 1
- 第3節 調査の方法 …………… 2
 1. 調査区の設定 …………… 2
 2. グリッド設定 …………… 3
 3. 包含層及び遺構調査の方法 …………… 3
 4. 整理作業 …………… 4
- 第4節 遺物の分類 …………… 6
 1. 土器 …………… 6
 2. 剥片石器 …………… 7
 3. 礫石器 …………… 7
- 第5節 遺跡の位置 …………… 9
 1. 厚真町の概要 …………… 9
 2. 遺跡の位置と周辺的环境 …………… 11
 3. 近世後期以降の富里地区 …………… 16
 4. 調査区の地形と地質 …………… 17

第II章 近現代及び

中世アイヌ文化期の調査

- 第1節 杭跡 …………… 21
- 第2節 焼土 …………… 22
- 第3節 包含層出土遺物 …………… 24
 1. 礫石器 …………… 24

第III章 縄文時代の調査

- 第1節 焼土・炭化物集中 …………… 26
 1. 焼土 …………… 27
 2. 炭化物集中 …………… 27
- 第2節 集中出土遺物 …………… 28
 1. 土器集中 …………… 28
 2. フレイク・チップ集中 …………… 29
- 第3節 包含層出土遺物 …………… 33
 1. 土器 …………… 33
 2. 剥片石器 …………… 35
 3. 礫石器 …………… 35
 4. 礫 …………… 36

第IV章 まとめ

1. 中世アイヌ文化期の焼土について …………… 40
2. 縄文時代の土器集中について …………… 40

第V章 自然科学的分析

- 第1節 厚真町富里4遺跡における
放射性炭素年代測定（AMS測定） …………… 41
- 第2節 厚真町富里4遺跡の動物 …………… 44
- 第3節 厚真町富里4遺跡から
出土した炭化種子 …………… 47
- 引用・参考文献 …………… 52
- 報告書抄録 …………… 63
- 奥 付

挿 図 目 次

I 章		図 II-4	III層包含層出土礫石器……………	24
図 I-1	グリッド設定・区分図及び座標杭 ・試掘坑位置図……………			
		III 章		
		図 III-1	V層遺構配置図……………	26
図 I-2	厚真町内遺跡分布図……………	図 III-2	VF-01～03・VCB-01・02 平面及び断面図…	28
図 I-3	富里4遺跡周辺の遺跡……………	図 III-3	VPB-01 平面・垂直分布図及び 周辺遺構配置図……………	30
図 I-4	基本土層図……………	図 III-4	VFCB-01 平面及び垂直分布図……………	31
II 章		図 III-5	V層遺構・包含層出土石器……………	34
図 II-1	O・III層遺構配置図……………	図 III-6	V層遺構出土石器……………	35
図 II-2	OKP-01～08 平面及び断面図……………	図 III-7	V層包含層出土石器……………	37
図 II-3	III F-01 平面及び断面図……………			

挿 表 目 次

I 章		表 II-3	III層包含層出土石器属性表……………	25
表 I-1	グリッド設定関係係杭数値一覧表……………	表 II-4	III層包含層出土礫属性表……………	25
表 I-2	富里4遺跡概要一覧表……………	III 章		
表 I-3	富里4遺跡出土遺物一覧表……………	表 III-1	V層遺構属性表……………	37
表 I-4	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1) ……	表 III-2	V層遺構・包含層出土石器属性表……………	38
表 I-5	厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2) ……	表 III-3	V層遺構・包含層出土石器属性表……………	39
表 I-6	富里4遺跡基本土層……………	表 III-4	VPB-01 出土礫属性表……………	39
II 章		表 III-5	V層グリッド別礫重量一覧表 (遺構含む)……………	39
表 II-1	O層杭跡属性表……………			
表 II-2	III層遺構属性表……………			

写 真 図 版 目 次

図版 1-1	調査前全景……………	図版 2-7	OKP-05 完掘……………	56
図版 1-2	旧石器調査トレンチ断面No.1……………	図版 2-8	OKP-05 断面……………	56
図版 1-3	旧石器調査トレンチ断面No.2……………	図版 2-9	OKP-06 完掘……………	56
図版 2-1	OKP-01・02 完掘……………	図版 2-10	OKP-06 断面……………	56
図版 2-2	OKP-01・02 断面……………	図版 2-11	OKP-07・08 検出……………	56
図版 2-3	OKP-03 完掘……………	図版 2-12	OKP-07・08 完掘……………	56
図版 2-4	OKP-03 断面……………	図版 3-1	OKP-07・08 断面……………	57
図版 2-5	OKP-04 完掘……………	図版 3-2	III F-01 燃焼面断面……………	57
図版 2-6	OKP-04 断面……………	図版 3-3	III F-01 断面……………	57

図版 3-4	調査状況(Ⅲ層)……………	57	図版 5-2	VFCB-01 検出 1……………	59
図版 3-5	Ⅲ層完掘全景……………	57	図版 5-3	VFCB-01 検出 2……………	59
図版 4-1	VF-01 検出……………	58	図版 5-4	V層スライパー出土状態……………	59
図版 4-2	VF-01 断面……………	58	図版 5-5	V層石斧出土状態……………	59
図版 4-3	VF-02 検出……………	58	図版 6-1	調査状況 1(旧石器)……………	60
図版 4-4	VF-02 断面……………	58	図版 6-2	調査状況 2(V層)……………	60
図版 4-5	VF-03 検出……………	58	図版 6-3	調査状況 3……………	60
図版 4-6	VF-03 断面……………	58	図版 6-4	調査状況 4(実測)……………	60
図版 4-7	VPB-01 検出 1……………	58	図版 6-5	V層完掘空撮……………	60
図版 4-8	VPB-01 根穴完掘……………	58	図版 7	V層遺構出土遺物……………	61
図版 5-1	VPB-01 検出 2……………	59	図版 8	Ⅲ・V層包含層出土遺物……………	62

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査要項と体制

1. 調査要項

事業名：厚真町防災施設整備事業 北部防災拠点施設建設（富里 4 遺跡）埋蔵文化財発掘調査

委託者：厚真町役場

受託者：発掘業務・(株)シン技術コンサル 整理業務・厚真町教育委員会

遺跡名：富里 4 遺跡（J-13-150）

所在地：勇払郡厚真町字富里 373-1、374-1

調査面積：令和 3 年度 393.5 m²

受託期間：令和 3 年 5 月 10 日 ～ 令和 4 年 3 月 31 日

調査期間：（発掘）令和 3 年 5 月 10 日 ～ 令和 3 年 6 月 11 日

（整理）令和 3 年 6 月 14 日 ～ 令和 3 年 9 月 30 日

2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 遠藤 秀明

生涯学習課 課長 加藤 克彦

主幹 乾 哲也（調査担当者）

主査 奈良法智（調査担当者）

工藤 肇（調査担当者・公務協力者）

会計年度任用職員 石山 容（発掘・整理）・伊藤つや子（事務）

整理作業員 3 名

(株)シン技術コンサル 調査担当者 工藤 肇（発掘） 発掘作業員 9 名 （奈良）

第 2 節 発掘調査に至る経緯

1. 発掘調査に至る経緯

平成 30 年(2018 年)9 月 6 日午前 3 時 7 分 59.3 秒に発生した北海道胆振東部地震において、厚真町字鹿沼に気象庁が設置する地震計で北海道内で初めての震度 7 を記録した。厚真町各地で家屋の倒壊や液状化などのほか、斜面崩壊による土砂災害の甚大な被害が発生し、関連死を含め 37 名もの尊い命が奪われた。特に厚真町市街地以北の幌内・高丘・富里・吉野・幌里地区の山間地域での土砂災害による犠牲者が多く、吉野地区では約 1.6km にわたる面的な斜面崩壊が発生し、15 軒の集落が 1 軒を残して壊滅状態となり 19 名もの犠牲者が出ている。これらの斜面崩壊の主要原因は、約 8,000～9,000 年前に降下堆積した樽前 d 火山灰が主要な発生原因とされている。

厚真町では、国、北海道と一体となった復旧復興作業を行っており、この 1 つとして甚大な被害を被った高丘・富里・吉野の 3 地区の避難防災拠点施設を新たに建設することとなり、今回の埋蔵文化財発掘調査の契機となった。

北部防災拠点施設の建設にあっては、厚真町役場まちづくり推進課復興推進グループが各自治会と建設予定地等の調整を進め、令和 2 年 12 月に関係自治会との協議の末、厚真町字富里

373-1に正式に決定した。その後、令和2年12月29日付けで厚真町長から埋蔵文化財保護に関する事前協議書が厚真町教育委員会（以下、町教委）へ提出され、町教委は12月30日付けで、所在調査報告書と合わせて北海道教育委員会（以下、道教委）へ提出した。道教委からの回答は試掘調査を町教委が実施するものであった（令和3年1月6日付け教文博第2762号）。

試掘調査は令和2年12月30日に町教委によって8カ所のトレンチを掘開し、うちTR-01とTR-07の2カ所から樽前cテフラを挟む上下層より遺物が出土した（図I-1）。トレンチ位置図や土層堆積柱状図、出土遺物写真図版作成等の整理作業を経て、令和3年1月8日付けで町教委から道教委へ報告書を提出した。道教委からの回答は、施設本体の試掘調査範囲内において「要発掘調査」と「要工事立会」が示され、施設隣接区域の舗装範囲や駐車場の盛土設計などの詳細が未定であったことから、周辺域は「要再協議」の回答となった（令和3年1月12日付け 教文博第2792号）。

この回答を受け、要発掘調査面積の約190㎡に関して事業者所管部署である厚真町役場総務課防災グループとまちづくり推進課復興推進グループ、調査実施機関となる町教委との間で調査体制や調査経費の積算等の協議を進めた。この結果、発掘調査を民間の埋蔵文化財調査コンサルタントへ発注し、整理業務、調査報告書刊行業務は町教委が直営で引き継ぐこととなった。

再協議書は、施設周辺の造成工事や駐車場、舗装施工の詳細が確定した令和4年3月30日付けで厚真町長より事前協議書が提出され、周辺域において試掘調査で遺物が出土している施設東側と南側の舗装施工部分は掘削施工となることから「要発掘調査」、遺物が出土しなかった隣接区域は「要工事立会」との道教委からの回答を得た（令和3年4月1日付け 教文博第4号）。最終的な要発掘調査面積は372.1㎡となった（図I-1）。

なお、再協議の回答を得て町教委が周知資料の整備として、富里4遺跡の埋蔵文化財包蔵地カードを新規作成し、道教委へ提出している（令和3年4月9日付け 厚教社号）。

最終的な要発掘調査面積のもと、町教委は土地所有者の厚真町から発掘調査承諾書の徴取や発掘調査支援委託業務発注の準備を進め、令和3年4月26日に厚真町長と町教委教育長との間に「富里4遺跡埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を取り交わし、調査費用や事務処理分担などの実施体制等が確定した。令和3年4月30日に発掘調査支援委託業務の契約を株式会社シン技術コンサルと厚真町役場で締結され、町教委は発掘調査準備工の表土除去のほか周辺住民への調査周知文書の配布等を行った。令和3年5月6日付けで厚真町役場から町教委経由で文化財保護法第94条の周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知が道教委へ提出され、5月10日から6月11日の期間での発掘調査着手となった。（乾）

第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

調査区は令和2年12月に実施した試掘調査の結果、道教委からの回答通知に従って、建物に付随する外構施設の掘削範囲を含むものである。調査区の設定については、事業者である厚真町から設計委託業者である(株)尾崎測量設計事務所が打設した9本の打設杭を範囲としている。なお、発掘調査区に隣接する北側地点については試掘結果により工事立会範囲回答されており、遺構・遺物は検出していない。

2. グリッド設定 (図 I-1)

発掘調査にあたっては任意座標で設定し、標高値基準点設定は(株)尾崎測量設計事務所が打設した調査区境界杭「201」・「202」・「203」・「T1」の4点を利用した。

グリッド網の設定は調査区长軸ラインに合わせて行い、基点は包蔵地推定範囲を全て網羅できる北東側の A-1 とした。公共座標 XY 軸には整合しない任意のグリッド網のため、真北から約 24.4° 東へ傾くラインをアルファベット軸として、これに直交するラインをアラビア数字で表記する軸とした。なお、グリッド網は任意であるが調査外の「J-9」・「K-9」・「K-10」・「L-10」の杭には上記の打設杭から世界測地系の X・Y 座標を算出している(表 I-1)。

各グリッドの呼称はグリッド網の北東コーナーの杭名としているため、基点の A-1 から 5m×5m の大グリッドを設定し、調査区の北東コーナーは I-3 区から始まる。グリッド杭は調査開始と共に町教委調査員が光波式トータルステーションを用いて調査区内及び周辺に打設を行った。調査工程上、樽前 c テフラ除去後に行う 2 回目のグリッド杭打設については、標高値が異なるため杭名末尾に「B」を付記し調査開始時の打設杭と区別している。なお、今回の調査出土遺物は全て座標点取り上げとしたため、中グリッドの 2.5m×2.5m は使用していないが、小グリッドの 1m×1m の 25 分割については図上で用いている(図 I-1)。

3. 包含層および遺構調査の方法

調査の準備段階として、町教委調査員立会のもとバックホウにより表土や耕作土と樽前 b テフラの除去を行った。調査着手日の 5 月 10 日以降は発掘調査支援委託業務受託者の(株)シン技術コンサルへ作業を引き継ぎ、遺物包含層のⅢ層黒色土上面はアイヌ文化期の遺構、遺物が検出される可能性があるため火山灰は 3cm 前後残し、Ⅲ層上面まではジョレンを用いて人力による清掃を行った。

調査方法に関しては、これまでの町内での調査や試掘調査の結果から、Ⅲ層は基本的にⅢa 層からⅢb 層下位にかけては移植ゴテを用いて 1~2cm 程度ずつ掘り下げた。面的な遺物出土状態などから、新しい時期のアイヌ文化期(Ⅲa 層、Ⅲb 層上位)、古い時期のアイヌ文化期(Ⅲb 層中位)、擦文文化期(Ⅲb 層下位)、続縄文文化期(Ⅲc 層)の 4 面(時期)を考慮したうえで調査を開始した。なお、包含層調査開始に先行して 2 ヶ所の試掘坑壁面及び基底面精査を行い、包含層堆積状況を確認した。包含層堆積状況はⅥ層掘削が終了した時点で北側及び南東側壁面の 2 ヶ所に重機でⅨ層上面までⅦ層の樽前 d テフラを重機で掘削し、旧石器調査を兼ねて段丘礫層まで手掘り調査を行い、全体の精査後に断面実測をした。

無遺物層のⅣ層樽前 c テフラはバックホウとジョレンを用いた人力で除去し、Ⅴ層黒色土はⅢ層と同じく上面よりⅤa 層、Ⅴb 層上位・中位・下位、Ⅴc 層、漸移層Ⅵ層との層位区分のもと可能な限り面的な調査に留意し、移植ゴテによる包含層掘削調査を実施している。なおⅤc 層から漸移層Ⅵ層にかけては、遺物出土密度が極度に減じたため、一部ジョレンを用いての調査とした。

遺構調査は、焼骨片を伴う焼土など上面から確認した遺構は土層観察ベルトを設定し、できるだけ構築面層位の把握に努めた。フローテーションサンプルは、焼骨を伴う焼土の燃焼面や形成面のほぼ全量、土器集中出土周辺土壌を合わせて合計 17.20 以上に及ぶ。なお、フローテーション選別の結果、土器集中からは微細物は出土していない。焼骨を伴わない焼土に関して

はトレンチを設定して、断面で遺構確認を行った。土器片集中は遺物の平面形を光波式トータルステーションで土器片個々の輪郭線を実測し、これを10分の1でプリントアウトしたものを素図として、出土状態の微細図を作成した。微細遺物を多量に含むフレイク・チップ集中は可能な限り長軸1cm以上を目安に光波トータルステーションで座標点記録をしながら取り上げ、一部土壌回収し、水洗選別で遺物を回収した。分布範囲に関しては遺物点を元に図上で示している。これらの平面図化は作業員が光波式トータルステーションで記録し、堆積状態については調査担当者が分層と土層注記を行い、作業員が堆積図作成の実測作業を行った。各調査経過は35mm一眼レフデジタルカメラで撮影記録した。なお、発掘調査区の等高線図はⅢ層上面が耕作により削平されているためⅤ層上面において、光波式トータルステーションで50cmメッシュの標高値単点を計測し、パソコン上での等高線作成を発掘調査支援業務受託者である(株)シン技術コンサルが作成した。

出土遺物はⅢ・Ⅴ層共に全点に遺物番号を付して取り上げた。遺物取り上げは調査員による層位確認と遺物種別を確認したうえで、光波式トータルステーションによるXYZ座標(公共座標)をデジタル記録し、取り上げた。この時、手簿(日付・グリッド・層位・遺物名等)の記載も行い、データ入力ミスの補完を行っている。縄文時代の遺物包含層調査終了後、旧石器遺物の確認調査のため、土層観察用のトレンチに合わせてⅧ層樽前dテフラをバックホウで除去した後、Ⅸ層の黄褐色系粘土質シルト層7.1㎡を移植ゴテやジョレンを用いて旧石器遺物の確認調査を行った。

4. 整理作業

一次整理は発掘調査と一部並行して遺物水洗作業と出土グリッドや層位の諸情報確認、遺物の種別分類作業、フローテーション作業を実施した。6月11日の作業終了日以降の整理作業は、町教委直営で実施し、公務協力者として工藤肇氏(元苫小牧市博物館学芸員)へ整理業務担当者に依頼し、さらに整理作業員3名を雇用したうえで一次整理作業の続きと二次整理の遺構図作成を実施した。

一次整理では出土遺物の水洗作業を終えたものから調査区遺構名や層位、種別、細分類、石材の判別等の諸情報の確認作業や土器、石器などの遺物番号等の注記作業を行ったほか、フローテーション処理後の選別作業も行っている。

二次整理は、各種遺物の接合・実測等の作業を行い、遺構図等平面図は(株)シン技術コンサルの「遺跡管理システム」を用いて作成し、遺構堆積図と組み合わせた第二原図の作成や遺物実測図のトレース作業・編集については、パソコン(0s Windows Adobe Illustrator2021)で行った。また、出土遺物のうち土器の拓本・断面、拓影図、剥片石器・礫石器の実測作業を(株)シン技術コンサルに委託し、遺物の写真撮影は担当者が行った。写真図版はパソコン(0s Windows Adobe Photoshop2021)で版組み編集している。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集・版組も上記のソフトで行い、本文原稿はWord、一覧表のExcelデータと合わせて印刷所へデジタル入稿した。

なお、フローテーションによって回収した動物遺存体と炭化種子は、整理作業員によって選別抽出し、札幌大学非常勤講師 高橋 理氏と北海道大学大学院文学研究院 高瀬克範氏に同定を依頼した。遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のものは、層位、遺構・調査区及び分類毎にコンテナに収納し軽舞遺跡調査整理事務所にて収蔵保管している。(奈良)

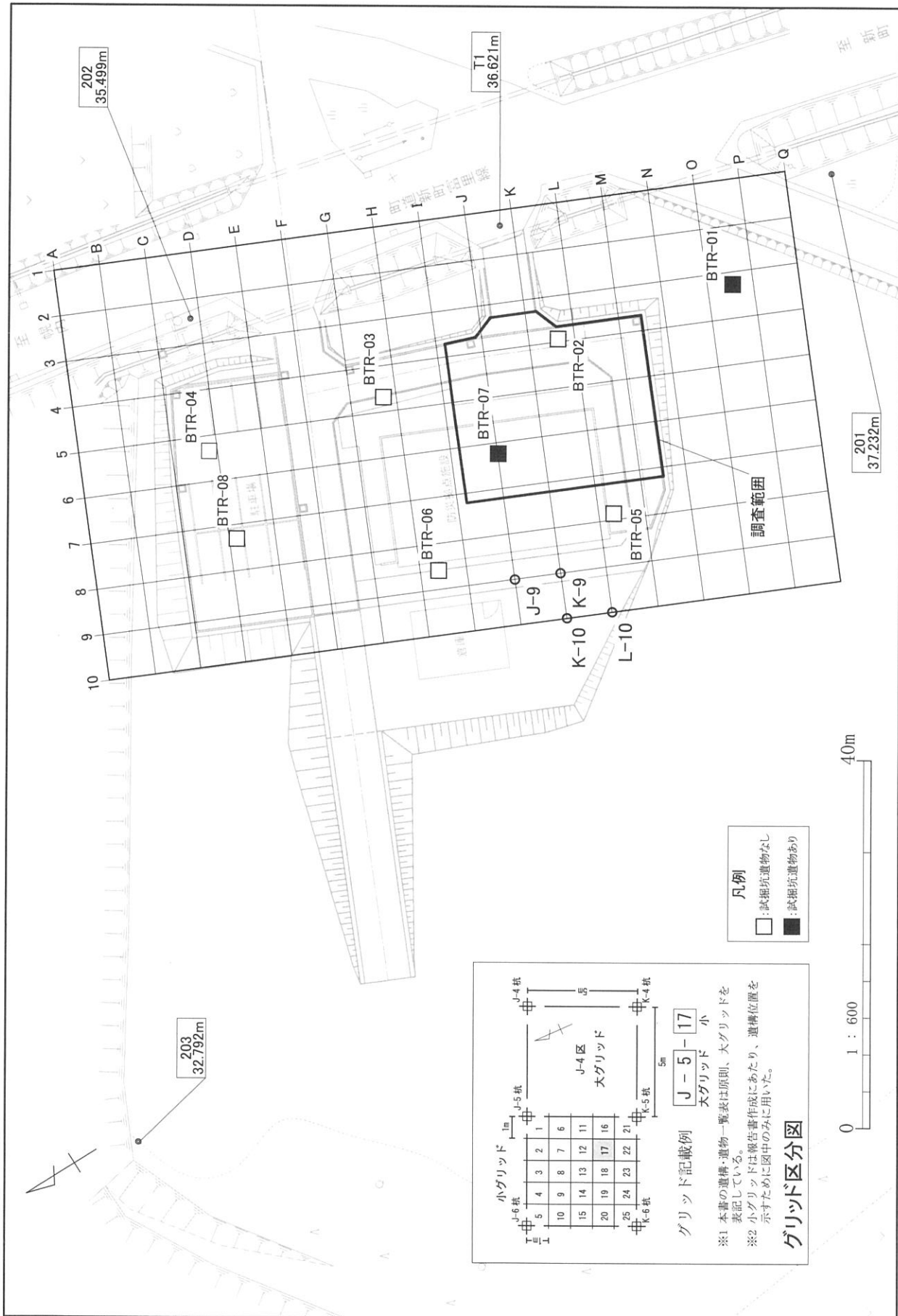


図 I-1 グリッド設定・区分図及び座標杭・試掘坑位置図

表 I-1 グリッド設定関係杭数値一覧表

測点名	世界測地系座標			任意座標(報告書用)	
	X座標	Y座標	Z座標	X座標	Y座標
201	-138240.515	-26725.047	37.232	-	-
202	-138173.299	-26701.263	35.499	-	-
203	-138120.802	-26774.038	32.792	-	-
T1	-138207.078	-26710.608	36.621	-	-
J-9	-138187.910	-26744.051	35.359	45.00	40.00
K-9	-138192.465	-26746.117	35.647	50.00	40.00
K-10	-138190.400	-26750.669	35.454	50.00	45.00
L-10	-138194.487	-26749.001	35.581	55.00	45.00

方位:設定グリッドに対して-24.4° が真北

第4節 遺物の分類

遺物の分類については、幌内8遺跡(町教委2020)の分類を基準として今回の調査で出土していない遺物については記述を省略した。

1. 土器

縄文時代早期から擦文文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで時期細分した。

第I群土器 縄文時代早期に属する土器。

A類 貝殻文・条痕文土器。

B類 早期後半の東釧路式土器群。絡条体圧痕文、組紐圧痕文などを施すもの。

B1類 東釧路Ⅱ式に相当するもの。

B2類 東釧路Ⅲ式、コッタロ式に相当するもの。

B3類 中茶路式に相当するもの。

B4類 東釧路Ⅳ式に相当するもの。

第II群土器 縄文時代前期に属する土器。

今回の調査では出土していない。

第III群土器 縄文時代中期に属する土器。

A類 中期前半の円筒上層式系土器群。

A1類 円筒上層a式またはb式に相当するもの。

A2類a サイベ沢Ⅵ・Ⅶ式に相当するもの。

A2類b 厚真1式に相当するもの。

B類 中期後半から末葉の土器群。

B1類a 萩ヶ岡1式に相当するもの。

B1類b 萩ヶ岡2式、天神山式に相当するもの。

B2類 柏木川式に相当するもの。

B3類a 北筒式に相当するもの。

B3類b 煉瓦台式に相当するもの。

第IV群土器 縄文時代後期に属する土器。

今回の調査では出土していない。

第V群 縄文時代晩期に属する土器群。

A類 晩期前葉の土器群。

A1類 爪形文や刺突文を施すもの。

A2類 大洞B・BC式土器に相当するもの。

B類 晩期中葉の土器群。

B1類 縄線文や円弧文を施すもの。美々3式、ママチⅠ・Ⅱ群に相当するもの。

B2類 大洞C1・C2式土器に相当するもの。

C類 晩期後葉の土器群。

C1類 ママチⅢ・Ⅳ・Ⅴ群に相当するもの。

C2類 大洞A・A'式土器に相当するもの。

第VI群土器 続縄文文化期に属する土器群。

今回の調査では出土していない。

第VII群土器 擦文文化期に属する土器群。

今回の調査では出土していない。

2. 剥片石器

ポイント類

長軸 4 cm を境に石鏃と石槍・石銛とを区分した。

A 「石鏃」

- 1 細身で薄手のもの。
- 2 無茎のもの。
 - a 平基。
 - b 凹基。
 - c 凸基・円基。
- 3 明瞭な茎部をもつもの。
 - a 柄が太いもの。
 - b 柄が細いもの。
 - ① 逆刺明瞭 ② 逆刺不明瞭 (弓状)
 - c 素材剥片を利用したもの

4 不明瞭な茎部を持つもの。

B 「石槍」・「石銛」

- 1 鏃身部が短い (比率 1.85 未満)
- 2 鏃身部が長い (比率 1.85 以上)
- 3 不明瞭な茎部のもの。
- 4 再調整品

C 欠損品・未成品

石 錐

今回の調査では出土していない。

ナイフ・スクレイパー類

縁辺に刃部が作出されたもののうち、素材の 1 辺に対し半分以上の範囲で刃部が形成されているもの。

A 「つまみ付きナイフ」

- 1 つまみ部軸線と体部軸線の角度が 30° 未満の「縦型」のもの。

2 つまみ部軸線と体部軸線の角度が $30 \sim 60^\circ$ 未満の「中間型」のもの。

3 つまみ部軸線と体部軸線の角度が 60° 以上の「横型」のもの。

「縦型」「中間型」「横型」はそれぞれ以下の分類に分けられる。

a 2 縁辺で構成。 b 3 縁辺で構成。

4 素材剥片につまみを形成するもの。

5 つまみ付きナイフに分類されるが欠損のあるもの。

B 素材端部に刃部が形成されているもの。

1 「ラウンド・スクレイパー」

a 刃部が全周するもの。

b 刃部が全周しないもの。

2 「エンド・スクレイパー」

C 素材端部に刃部が形成されていないもの。

1 「サイド・スクレイパー」

2 「コンケイブ・スクレイパー」

3 「抉入石器」

D 続縄文文化に伴う「ナイフ状石器」

E 欠損品

両面調整石器

今回の調査では出土していない。

R. F・U. F

一縁辺の長さの半分以下の調整痕があるものを R. F、使用による細かな剥離があるものを U. F とした。

ピエス・エスキーユ

今回の調査では出土していない。

石 核

今回の調査では出土していない。

5 欠損品

B 未成品 1 : 礫皮をほぼ残さず、研磨・剥離・敲打調整により完成に近いもの。

C 未成品 2 : 調整痕は認められるが半分以上の礫皮を残すもの。

D 未成品 3 : 調整痕は認められないが石斧素材礫と思われるもの。

3. 礫石器

石 斧

A 磨製石斧

- 1 短冊形
- 2 撥形
- 3 丸のみ形
- 4 剥片素材のもの

たたき石

敲打痕が面状に形成されるもので、素材礫の形状で分類し、使用箇所を細分した。

- I 平面形が縦長のもの。
 - A 扁平のもの。
 - 1 素材礫の平坦面に敲打痕があるもの。
 - 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕があるもの。
 - 3 1・2が並存するもの。
 - B 棒状または角柱状のもの。
 - 1 素材礫の平坦面に敲打痕があるもの。
 - 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕があるもの。
 - 3 1・2が並存するもの。
- II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。
 - A 扁平のもの。
 - 1 素材礫の平坦面に敲打痕があるもの。
 - 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕があるもの。
 - 3 1・2が並存するもの。
 - B 棒状または角柱状のもの
 - 1 素材礫の平坦面に敲打痕があるもの。
 - 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕があるもの。
 - 3 1・2が並存するもの。

III 平面形が円～楕円形のもの。

- A 扁平のもの。
- B 球形または棒状のもの。

IV 破片のため上記に分類不可のもの。

V 礫片を素材とするもの

すり石

- A 断面三角形の礫の稜に擦り面があるもの。
- B 断面楕円形礫の側縁に擦り面があるもの。
- C 扁平礫の側縁・端部に擦り面があるもの。
- D 北海道式石冠
- E その他
- F たたき併用

砥石

素材礫の形状が変形する使用面があるもの

石鋸

今回の調査では出土していない。

滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面があるもの。
線条痕はほとんど観察できない。

線条痕のある礫

今回の調査では出土していない。

石皿・台石

今回の調査では出土していない。

加工痕ある礫

今回の調査では出土していない。

表 I-2 富里4遺跡概要一覧表

発掘調査面積(m ²)	393.5m ²					備考
時代	遺構名					
	焼土	杭跡	土器集中	フレイクチップ集中	炭化物集中	
近現代	-	8	-	-	-	
中世アイヌ文化期	1	-	-	-	-	
縄文時代	3	-	1	1	2	

表 I-3 富里4遺跡出土遺物一覧表

遺構名/包含層	細分類										合計
	土器	剥片石器	礫石器	剥片類	礫	石斧石器群削片	鉄製品	陶磁器	ガラス製品		
	P	FT	ST	FC	S	SFC	IP	CP	GP		
Ⅲ層	ⅢF-01	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
	包含層	7	-	-	-	14	-	-	-	-	21
Ⅴ層	VPB-01	947	-	-	-	10	-	-	-	-	957
	VCB-01	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	VFCB-01	-	3	-	1,111	-	-	-	-	-	1,114
	包含層	16	4	12	1	164	1	-	-	-	198
試掘坑	BTR-01	3	-	1	-	1	-	-	-	-	5
	BTR-07	1	1	1	18	2	-	-	-	-	23
耕作土	-	-	-	-	4	-	2	18	1	25	
表採・攪乱	-	-	-	4	3	-	-	-	-	7	
合計	976	8	14	1,134	199	1	2	18	1	2,353	

第 5 節 遺跡の位置

1. 厚真町の概要

A 地理的環境

厚真町は、石狩低地帯南部の東縁に隣接し、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口 4,397 人（令和 4 年 1 月末現在）の農業の町である。町域の総面積は 404.56 km²で、流路 52.3km の二級河川厚真川流域に広がり南北 32.5km、東西 17.3km と細長く、南部は約 6.5km にわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で 35 分、海上物流の拠点である苫小牧港からは 40 分と現代社会において利便性に恵まれた位置環境でもある。町域を縦貫する厚真川は源流部から河口まで厚真町域のみを流下している。行政区域の北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南部の標高 200～600m の山地が続き、総面積の約 70% を山林が占める。東は夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西は標高 100m 前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東地区）内で苫小牧市と接している。厚真の語源は 3 説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」(at-to-mam 「向こうの湿地帯」) で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したという（厚真村 1956）。

町内は、大きく 4 つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区で、むかわ町と接し、入鹿別川流域の鹿沼地区がある。ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。

南部は砂浜が続き、明治期以前より地引網での鰯漁が盛んであったが、現在では苫小牧沿岸にかけてウバガイ（ホッキ貝）の全国一の漁場となっている。かつては標高 10m 前後の砂丘列が発達し、背後には海岸平野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で、苫小牧東港や道内最大の火力発電所、国内最大の石油備蓄タンク群等の工業用地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区の静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開折された標高 10～20m 前後の支笏火山・樽前山の火山砕屑物で構成される低平な台地と湿地、湖沼群が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は苫小牧市域の静川台地や柏原台地とほぼ同じ地

形・地質様相を呈している(仮称厚和台地・鯉沼台地)。

中部には厚真町の中心市街があり、鶴川、平取・穂別、早来、浜厚真方面への道道交差部に官公署や住宅地が形成されている。町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展してきた経緯がある。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知決辺川、ウクル川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追丘陵南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。

中部以北の厚真川中流域は、厚真川は頗美宇川(はびう)との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、本流とシュルク川、幌内川の3河川の合流点でもある。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、昭和5年から24年までJR早来駅とを結ぶガソリン機関軌道が敷設されていた。2018年9月6日発生の北海道胆振東部地震において土砂災害が最も激しかった地域であり、現在は住宅や道路、農地に面した崩壊地等の災害復旧作業は概ね完了しているものの、震災後の人口流出が激しく、今後の復興、地域振興が課題となっている。山間部となる厚真川上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く。標高400m以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を特徴とする壮年期地形を呈している。厚真川源流部は夕張市、由仁町との1市2町の境界線付近、標高500m付近の夕張山地南域にある。

B 歴史的環境

埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には令和3年11月末現在で、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期、近代に至る151カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている(図I-2、表I-4・5)。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区および幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇川流域の高丘地区や厚幌ダム湛水区域内に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝之上地区、むかわ町穂別・豊田地区に抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられ、土器胎土中に石英結晶を多量に含む富良野盆地系土器がややまとまって出土している。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が1カ所検出されており、AMS法炭素年代測定の結果、補正年代3点の平均で14,591.69±60yrB.P.が得られている(町教委2006)。縄文時代の最も古いものでは豊沢4遺跡の試掘調査で早期中葉の物見台系貝殻文土器片1点が出土し、豊沢2遺跡において沼尻式ないしは住吉町式の土器片が採集されている(宮夫1980)。時期が下って浜厚真3遺跡で東釧路Ⅱ式土器がややまとまって出土(道埋文2003)しており、早期中葉から後葉にかけての遺跡は厚真川中下流域に多く、上流域の調査では中茶路式期以降に遺物量が増加してくる。町内における遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の縄文尖底土器群の時期と考えられ、多量の被熱礫や哺乳網の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時

代後期中葉から後葉にかけては遺跡数が激減し、晩期前葉以降、縄文文化期に再び増加し、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する傾向にある。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異として擦文文化期中期後半から中世・近世アイヌ文化期にかけては遺跡数が急激に増加し、多種多様な交易性の搬入遺物が出土し、注目されている。
(乾・奈良)

2. 遺跡の位置と周辺環境

A 地理的環境

富里 4 遺跡が所在する富里地区は昭和 32 年の字名地番改正までは当仁加(富仁加)と称し、アイヌ語の「ト°ンニカ」を語源として「カシワの林・のかみ」の意とされている(厚真村 1956)。遺跡は厚真川と北から流れ込む頗美宇(ハビウ)の合流点に広がる標高約 35m の河岸段丘上に形成され、盆地的様相の中央部に位置している。北東側の厚真川対岸には標高約 170m の無名山(地域呼称: 檜山、アイヌ語地名: コムニヌプリ)を見上げる位置にある。富里地区の気候条件としては内陸性気候と海浜性気候と中間的で、6 月頃の海霧の侵入は少なく、冬季の積雪量なども厚真町内において中間的な気候地域と言える。先述したコムニヌプリはアイヌ語で「ドングリの・群生する・山」の意(厚真村 1956)とされており、河岸段丘や丘陵地帯はコナラ属が主体を占める森林地帯であったことが推測される。

B 周辺の遺跡

富里 4 遺跡周辺には、縄文時代から近現代までの時期にわたる 4 遺跡が所在する(図 I-3)。この地区における近年の調査例ではニタツナイ遺跡(J-13-104)と富里 2 遺跡(J-13-106)、富里 3 遺跡(J-13-133)があり、いずれも厚幌導水路建設に伴う発掘調査が実施されている(町教委 2009・2010b、道埋文 2016)。

周辺で発掘調査を行った遺跡についてはいずれも厚真川と頗美宇川の合流地点に面した河岸段丘上(ニタツナイ遺跡: 南東に約 670m・標高約 46m、富里 2 遺跡: 北西約 330m・標高 34m 前後、富里 3 遺跡: 北東側に隣接・標高約 32m)に立地している。

ニタツナイ遺跡は平成 19・20 年に町教委で発掘調査・工事立会を実施し、遺跡は縄文時代前期前葉から近現代まで多岐にわたる遺構・遺物が出土している。縄文時代は前期前葉の尖底土器群から円筒土器下層 a 式並行期にかけて主体を占めており、多く出土する被熱礫や焼骨片もこの時期に伴うものと思われる。また、擦文文化期においては竪穴式住居跡 3 軒、平地式住居跡 1 軒を検出しており、土器型式から擦文後期後半に帰属する。包含層にはこのほかガラス玉や断面が「Z」字状のアムール川中流域に分布するパクロフカ文化の鉄鏃が出土するなど、当該期の交易を示す貴重な出土例となっている。アイヌ文化期においては 1667 年降下の樽前 b テフラの上下で住居跡が検出され、樽前 b テフラ直下からは送り場祭壇(ヌササン)跡とこれに伴うシカの頭骨を安置した獣骨集中や物送り(イワクテ)跡地のほか、樽前 b テフラ降下後、1694 年降下の駒ヶ岳 c2 テフラにかけての時期では住居跡 4 軒の内部から鍛冶遺構や銅製銚子などの金属製品等が多量に出土し、近世アイヌ文化期 17 世紀中葉の精神儀礼や交易を示す貴重な調査事例となっている(町教委 2009)。

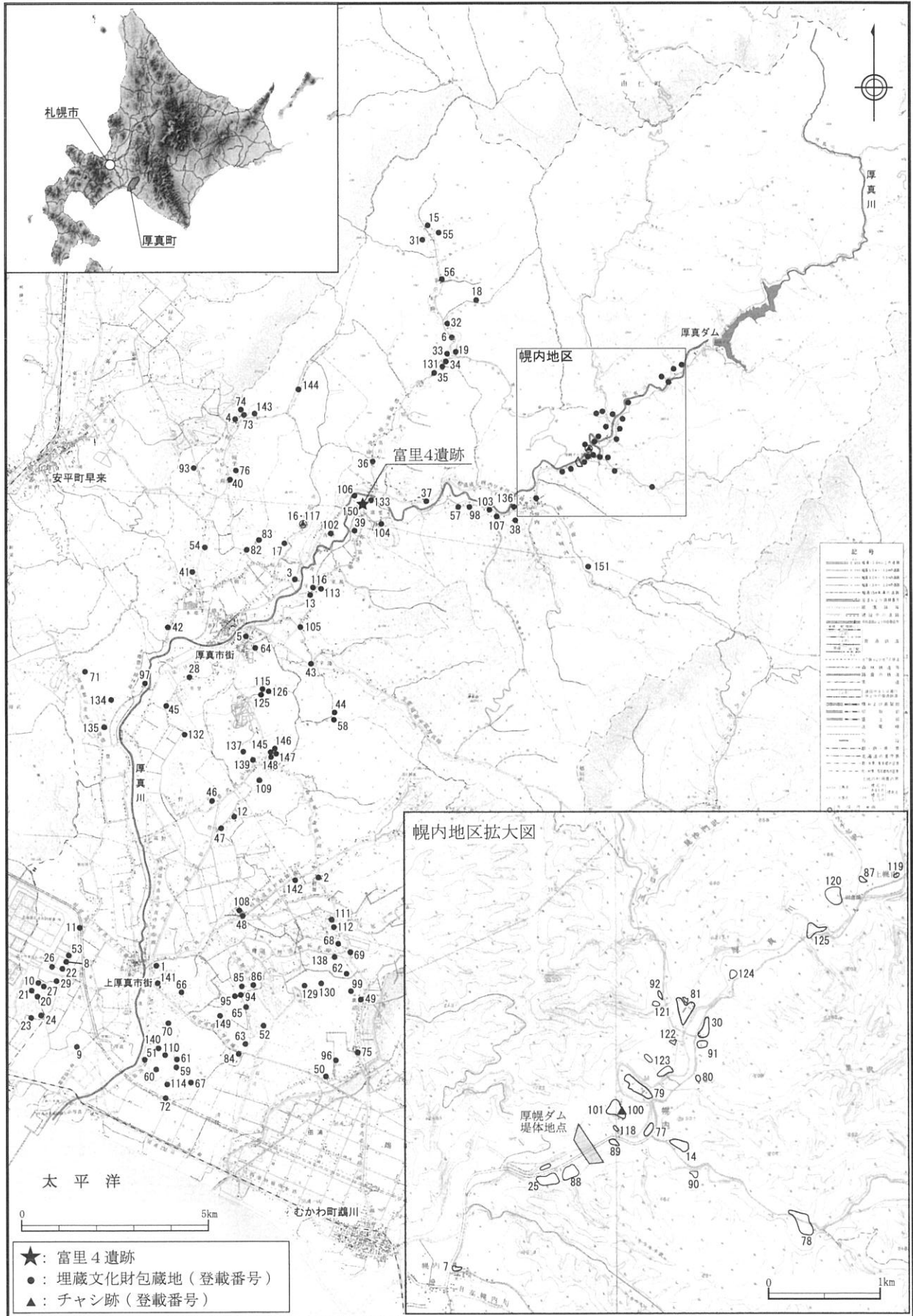


図 I -2 厚真町内遺跡分布図 (令和4年1月現在)

表I-4 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登録番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文早・中期、統縄文期 擦文期、中・近世アイヌ期	2021
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期、統縄文期	
3	墳墓・ 遺物包含地	朝日遺跡	縄文中～晩期、統縄文期、 擦文期、中世アイヌ期、近代	2012・13
4	遺物包含地	幌里1遺跡	縄文中・晩期、統縄文期	
5	墳墓・ 遺物包含地	新町遺跡	縄文早・中期、統縄文期、 アイヌ期	
6	遺物包含地	高丘1遺跡	縄文中期・統縄文期、 擦文期、アイヌ期	
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中・後期	
8	集落跡	共和遺跡	縄文晩期、統縄文期、 擦文期	1978
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	詳細不明	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	1977・78
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文時代	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡	統縄文期	
13	遺物包含地	東和遺跡	縄文後期	
14	集落跡	オニキシベ1遺跡	縄文早～晩期、擦文期	2012・13
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文後・晩期、擦文期	2021
18	遺物包含地	高丘2遺跡	詳細不明	
19	集落跡	高丘10遺跡	詳細不明	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	1976
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文時代	1977
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、 擦文期	1978・79
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文中・後期、統縄文期、 近代	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文時代、統縄文期	
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、 擦文期、中・近世アイヌ期	2002・03 ・08・12・ 13・15
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期、統縄文 期、擦文期	1977・78
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文早・中～晩期、 統縄文期	1977
28	溝穴遺構	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文早・後・晩期、擦文期	1979
30	集落跡	上幌内1遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、 擦文期、中世アイヌ期	2014・16
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文時代	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文時代	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文時代	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文中期	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文時代	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	統縄文期	
37	集落跡	富里1遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、 擦文期、中・近世アイヌ期	2015・16
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文時代	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	擦文期	2014
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	縄文後期	
45	遺物包含地	美里1遺跡	縄文中期	

登録番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	縄文早期	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	統縄文期・擦文期	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡	縄文中期	
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡	縄文中期	
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡	縄文早期	
51	遺物包含地	厚和1遺跡	縄文中期、アイヌ期	
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早期	1980
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文時代	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文時代	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前期、近世アイヌ期	2009
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文時代	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文時代	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文後期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文時代	1999・ 2000・18
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文前期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文中～後期	2000
72	溝穴遺構	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	2002
73	遺物包含地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	2021
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文時代	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文時代	
77	集落跡・ 墳墓	オニキシベ2遺跡	縄文中・後期、統縄文期、 擦文期、中世アイヌ期	2007・08
78	集落跡	オニキシベ3遺跡	縄文早・中・後期	2014・16
79	集落跡・ 墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器、縄文早・ 中～晩期、統縄文期、 擦文期、中・近世アイヌ期	2004・07
80	溝穴遺構	一里沢遺跡	縄文早～後期、擦文期、 アイヌ期、	2014
81	集落跡	シヨロマ1遺跡	縄文早～後期、擦文期、 中世アイヌ期	2013・16
82	遺物包含地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	集落跡	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	2006・07
86	遺物包含地	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドユクチ セ遺跡	縄文後期	
88	集落跡	厚幌2遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、 中世アイヌ期	2015・17
89	集落跡	オニキシベ4遺跡	縄文早・中～晩期、統縄文 期、擦文期、中世アイヌ期	2012
90	集落跡	オニキシベ5遺跡	縄文中期・後期	2010・11
91	集落跡・墳墓	上幌内2遺跡	縄文早～後期、統縄文期、 擦文期、中世アイヌ期	2014・16
92	集落跡	シヨロマ2遺跡	縄文前～後期	2013・14

表 I-5 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

登録番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文時代	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、中世アイヌ文化期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文時代	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	統縄文期、擦文期	
98	集落跡	幌内6遺跡	縄文前～晩期、擦文期、中世アイヌ期	2015
99	集落跡	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ブチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	2008・10
101	集落跡	ブチャラセナイ遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2008-12
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	集落跡・遺物包含地	幌内7遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2008・15・16
104	集落跡	ニタツプナイ遺跡	縄文前～後期、統縄文期、擦文期、近世アイヌ期、近代	2007・08
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	遺物包蔵地	富里2遺跡	縄文後・晩期、擦文期、近世アイヌ期	2009
107	集落跡・遺物包蔵地	オコッコ1遺跡	縄文前～後期、統縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2015・16
108	遺物包含地	軽舞2遺跡	縄文前期、統縄文期	
109	集落跡	豊沢5遺跡	縄文後・晩期	2016
110	遺物包含地	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	溝穴遺構・遺物包含地	豊丘2遺跡	縄文早期	2017
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包含地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包含地	桜丘2遺跡	縄文中期	
118	溝穴遺構	オニキシベ6遺跡	縄文前～晩期、統縄文期、擦文期	2012
119	溝穴遺構	イクバンドユクチセ2遺跡	縄文中・後期	2013
120	集落跡・遺物包含地	イクバンドユクチセ3遺跡	縄文早・中・後期、擦文期、中世アイヌ期	2013
121	墳墓・遺物包含地	シヨロマ3遺跡	縄文早～後期、統縄文期、擦文期	2013

登録番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
122	集落跡	シヨロマ4遺跡	縄文早・中・後期、縄文文化期、擦文期、中世アイヌ期	2014
123	集落跡・墳墓	上幌内3遺跡	縄文早～後期、統縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期	2013・14
124	集落跡	上幌内4遺跡	縄文早～後期、中世アイヌ期	2014-16
125	集落跡・溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文中・後期	2013・15・16
126	遺物包含地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包含地	豊沢8遺跡	縄文後期	
128	遺物包含地	ライカルマイ遺跡	統縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期、近代	2010・11
129	遺物包含地	長沼1遺跡	縄文早期	
130	遺物包含地	長沼2遺跡	縄文中期	
131	遺物包含地	高丘13遺跡	縄文前期、擦文期	
132	遺物包含地	上野1遺跡	縄文中期	
133	溝穴遺構	富里3遺跡	縄文中・晩期、アイヌ期	2015
134	遺物包含地	豊川3遺跡	縄文晩期	
135	遺物包含地	三ヶ月沼遺跡	縄文晩期	
136	集落跡	幌内8遺跡	縄文早～晩期、統縄文期、中世アイヌ期	2018-19
137	遺物包含地	豊沢9遺跡	縄文時代	
138	溝穴遺構	鯉沼5遺跡	縄文時代	
139	遺物包含地	豊沢10遺跡	縄文後・晩期	2017
140	溝穴遺構	厚和11遺跡	縄文時代	
141	溝穴遺構	厚和12遺跡	縄文時代	
142	遺物包含地	軽舞3遺跡	縄文早・中・後期、擦文期	
143	遺物包含地	ニタツポロ沢2遺跡	縄文中期	
144	遺物包含地	幌里5遺跡	縄文中期	
145	遺物包含地	豊沢11遺跡	縄文中期・統縄文	
146	遺物包含地	豊沢12遺跡	縄文中・後期	
147	溝穴遺構	豊沢13遺跡	縄文時代	2020
148	遺物包含地	豊沢14遺跡	縄文後期	
149	溝穴遺構	厚和13遺跡	縄文時代	
150	遺物包含地	富里4遺跡	縄文早・中・晩期、中世アイヌ期	2021
151	遺物包含地	日高幌内1遺跡	縄文中期	2021

富里 2 遺跡は平成 20 年に町教委で発掘調査を実施した。遺跡は縄文時代では後期後葉から晩期中葉が主体で、特筆する遺物としては拳大の黒曜石石核 1 点出土している。後続する統縄文時代については遺物が少量のみであるが、擦文文化期において区画遺構とした溝跡を 1 ヲ所検出している。この溝跡については掘り上げ土直下に白頭山-苫小牧テフラ、上面から樽前 b テフラとの間に黒色土が 3～4 cm 堆積していることから、層的に当該期の遺構と判断している。この溝跡は調査区外に続くことが想定されていたため、4 ヲ所のトレンチを掘開し試掘を行い全体の形状確認を行ったところ、段丘先端を弧状に区画する遺構であることが分かった。こうした溝で区画する遺構は後続するアイヌ文化期の「チャシ跡」に繋がる可能性がある。溝跡には明瞭に伴う遺物は出土していないが、包含層より白頭山-苫小牧テフラの上層から擦文中期後半の土器が出土している。アイヌ文化期は平地式住居跡 1 軒をはじめ建物跡 2 軒、灰集

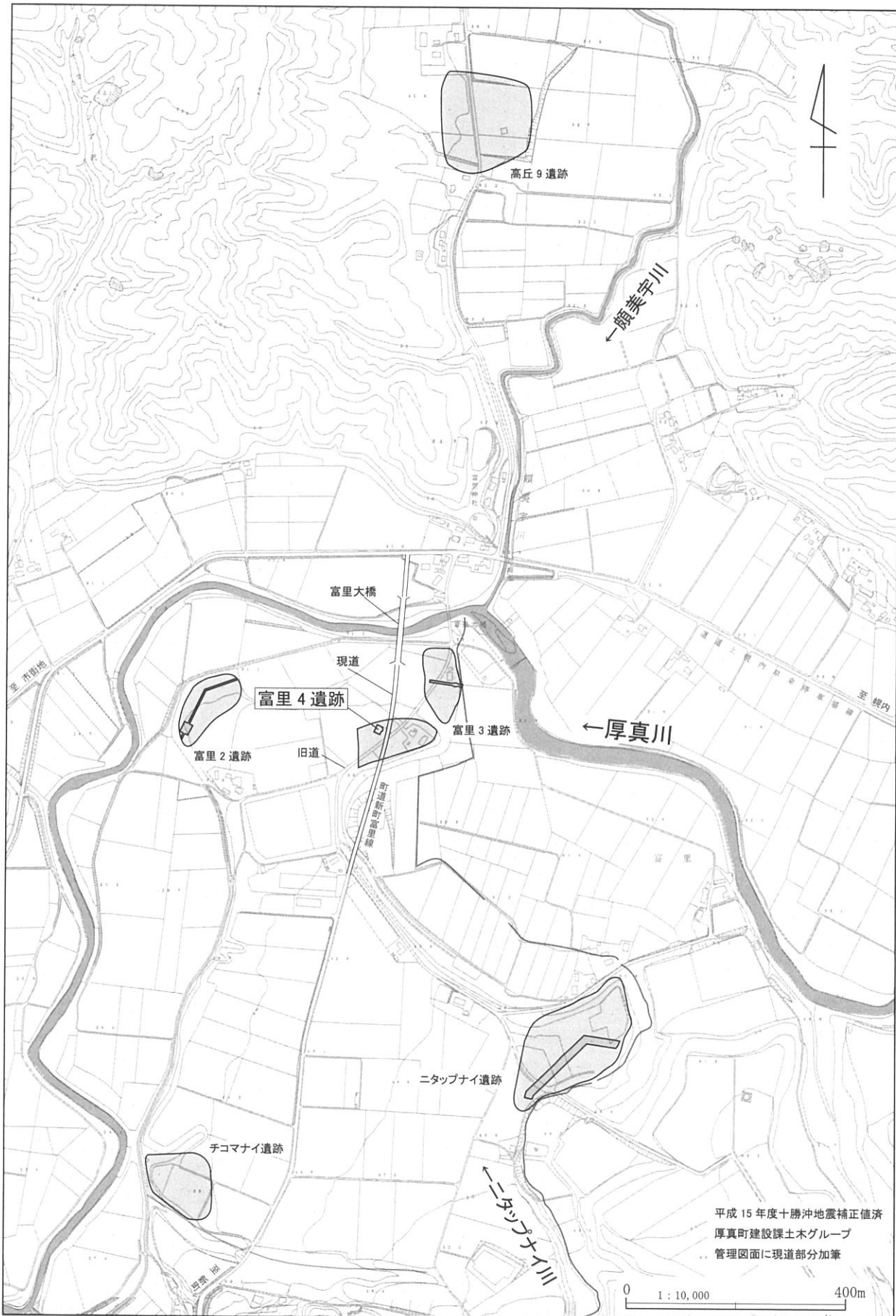


図 I-3 富里 4 遺跡周辺の遺跡

中4ヵ所、焼土1ヵ所など樽前bテフラより下層1~3cmに連続して検出していることから、近世アイヌ文化期の中でもやや時期差をもっていることがわかる。また、町内で初めて出土となる瀬戸・美濃産の挿鉢片が1点出土している（町教委2010b）。

富里3遺跡は平成27年に道埋文センターで発掘調査を実施した。遺跡は縄文時代のTピット1基、柱穴状小土坑2基検出し、遺物は晩期中葉の土器が主体を占めている。アイヌ文化期では灰集中1ヵ所のほか漆塗膜片が出土しており、年代測定結果から近世アイヌ文化期と報告されている。発掘調査地点は、部分的にV層上面まで削平を受けていることから遺構・遺物が少量であった（道埋文2016）。厚真川に張り出した北側段丘先端部のカラマツ林が主体部の可能性も考えられる。（奈良）

3. 近世後期以降の富里地区

富里地区の最初の文献資料として、寛政10・11年（1798・99年）の近藤重蔵らの幕府蝦夷地見分において寛政11年の新暦1月16~18日にシコツ（現千歳市）からホベツ（現むかわ町穂別）へ向かう途中、帰路の新暦1月25・26日に現在の富里地区に訪れた記録が残されている。従者の木村謙次（後に水戸藩士）による『蝦夷日記』には「トンニカ」と記され8軒のアイヌ家屋の存在が記されている。特筆すべき記述として「東蝦夷地の部トンニカ酋長フンヒラロ古兵器所蔵」があり、木村が所蔵兜を観察し、古い形態の「桃形」と称するもので、源義経の遺物であること疑いなしと記されている（木村1799、北海道同盟1892、土井2012）。なお、これより約60年前の元文4年（1739年）頃に記された『蝦夷商賈聞書』には「右之山奥ニアツマト申所ニ城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテアリ、蝦夷共ウキクルミト申而今ニ申伝ル」との記述があり、厚真のアイヌ民族における義経にまつわる伝承が記されている（著者不明1739）。

その後、安政5年（1858年）、松浦武四郎が6回目の蝦夷地探検の際に、勇払会所から厚真川河口を経て当地区のトンニカ村を訪れ、旧暦6月21~24日にかけて3泊し、戊午安都麻日誌に記録されている。コタンはアイヌ民族4軒24人が記され、うち半数以上の者が勇払漁場労働への雇に遣わされており、老人子供病人のみがコタンに残っている。このため各家々で畑作が盛んで稗粟雑穀類をそれぞれ15・16俵も収穫している。しかし武四郎が訪れる直前に洪水が発生し、畑地が流されていた。勇払からの案内人イカシユ（和名板蔵）の家に宿泊し、家内の宝物に多数の漆器類や刀剣類が飾り掛けられ、夜食には粟団子のもてなしを受けていることや当地区での津波伝承なども記している（松浦・秋葉1985）。

これら近世19世紀初頭から中葉にかけての主な2つの記録における富里地区は、コタン構成の戸数は少ないながらも、宝物が豊富であることが特筆すべき事項と思われる。

近代明治時代における富里地区に関する記録は明治5年（1872年）の北海道開拓使勇払出張所の記録では「トンニカ村4軒20人畑地6反6畝11歩8分」と記され、明治6年の間歇熱の流行対策での記録で「トニカ村11軒40人」とあり、町内の他の3ヵ所のコタンと合わせ20名の患者が出ていたことが記されている（厚真町1998）。

明治32年（1899年）制定の旧土人保護法により明治40年に当地区のアイヌ民族10名が耕作地の下付地申請も行っており、昭和30年（1955年）頃まで現在の富里3遺跡付近にて熊送り儀礼（イオマンテ）が執り行われおり、クマの頭骨も10個ほど祀られていたという（東和地区犬飼仙松氏談）。近隣のニタツプナイ遺跡の発掘調査では、近現代のチセ跡も調査（町教

委 2009) しており、近年まで富里地区の共同墓地にはアイヌ民族の伝統的墓標(クワ)も 2 基ほど現存していた(山本 2009)。近現代に至るまで厚真町内のアイヌ民族の歴史を色濃く残す地域でもある。

この地区における最初の和人移住者は、明治 14 年(1881 年)に山本栄三郎、鉄太郎親子が未開地払下げを申請し美々村より移住したことが初めであり、厚真町内陸部の農業開拓の先駆けとなった。明治 27 年頃には水稻栽培も始まり、行政単位としての厚真村が苫小牧村から分離独立した明治 30 年(1897 年)には天皇家新嘗祭への献上米も供出している。なお、山本鉄太郎は明治 30 年、開村における戸長の諮問、民意の代表として総代人にも選出されている。開拓移住者も増え明治 29 年にはジャガイモからの澱粉工場設立、農地も増え続け、明治 44 年には当仁加・老軽舞用水組合が設立され農業開拓がさらに進むこととなる。このほか、明治 37 年(1904 年)に三井物産が早来から現在の本郷地区まで木材搬出を目的とした馬車軌道が敷設され、明治 44 年(1911 年)には当地区を経て幌内地区まで延長されている。当地区にはトニカ停車場が開設され、木材・枕木の集積地としての写真が残されており、昭和 24 年(1949 年)のバス転換に伴い閉所、撤去された。

現在までは水田畑作地域としての発展を遂げている。昭和 45 年(1970 年)、平成 22 年(2010 年)にも当地区から献上米を供出し、厚真川中流域の沖積低地には美田が広がっている。遺跡が立地する河岸段丘上は畑作が盛んで、昭和 54 年(1979 年)から平成元年度にかけての道営農地開発事業により広大な畑作地帯が形成され、厚真町としても昭和 58 年に野菜共同選果場を建設している。平成 30 年 4 月には地下埋設型の国営農業用水路「厚幌導水路」も竣工し、さらなる農業発展への基盤が整えられている。(乾)

4. 調査区の地形と地質

富里 4 遺跡が立地する河岸段丘は、現地表面で標高約 35~36m の北向き緩斜面を形成し、厚真川の流路方向と一致する特徴的な傾斜である。この段丘面は、河岸段丘堆積物 X 層に恵庭 a パミス、ロームの二次堆積物が認められ、上層に樽前 d テフラ(約 8,000~9,000 年前降下)のフォールユニットが堆積していることから、恵庭 a テフラ(約 20,000 年前降下)降下後に離水、形成した河岸段丘面である。厚真川流域の河岸段丘面区分において、T3 面に帰属する(町教委 2006)。調査区内において、J-3 区から M-7 区にかけては標高約 36m の河岸段丘平坦面で、北側は約 35m までの緩斜面となっている。遺構遺物の分布状況は縄文時代のフレイク・チップ集中を除き、平坦面に集中する傾向があり、試掘調査結果と合わせて考慮すると、調査区南側に隣接し、現在は町道敷設に伴って埋め立てられた河跡湖に面して形成された遺跡と思われる。なお北東部に近接する富里 3 遺跡(河岸段丘 T2 面)とは河岸段丘面が異なることから、新たな包蔵地として区分した。

本遺跡の地質的様相は、以下に表層から記述していく。調査区は近代以降の 0 層・耕作によって、全面を覆う II 層・樽前 b テフラ(1667 年降下)から部分的に IV 層・樽前 c テフラまで削平を受けているため、I 層・表土は認められない。この耕作の影響で樽前 b テフラが面的に残存するのは調査区北西部分のみであった。

III 層黒色腐植土は、これまでの町内調査結果と同様、上層の樽前 b テフラや下層の樽前 c テフラとの混合比によって a~c に分層した。今回の調査では III b 層から主体的に遺構・遺物を検

出しており、中世アイヌ文化期の遺物包含層である。また、Ⅲb層とⅢc層との境界付近には白頭山-苦小牧テフラ（946年降下）が斑状に堆積している。粒度淘汰が非常に良好なアッシュ状のテフラで、顕微鏡観察により火山ガラスを観察できる。

Ⅳ層・樽前cテフラは粒径1mm前後のパミスで、層厚は約10cm、約2,500年前の縄文時代晩期中葉以降に降下した火山灰で、c1～c3まで細分されるうち、c2テフラに相当する。

Ⅴ層黒色腐植土は上層のⅢ層と同様、上下層の樽前cテフラ、樽前dテフラの混合比率によって上位からa～cに分層した。今回の調査では、Ⅴa層、Ⅴb層から遺構・遺物が主体的に検出している。Ⅴa層からは土器集中を検出しており、縄文時代晩期後葉の包含層に相当する。

Ⅵ層はⅤc層とⅦ層・樽前dテフラとの漸移層で樽前d1テフラとの混合が進んでいる。これまでの調査結果同様、縄文時代早期に相当し、今回の調査では試掘坑から同時期所産の土器が1点出土している。

樽前dテフラ降下堆積層（約8,000～9,000年前降下）をⅦ層とした。これまで厚幌ダム地域でⅦ層は、T2面において本来Ⅶ層とする樽前dテフラを基質とする水成二次堆積層が発達している。しかし、本遺跡は恵庭aテフラ降下以降に離水し、二次堆積層が欠落しているため、プライマリーな樽前dテフラをⅦ層としている。Ⅶa層の樽前d1は3～5cmの層厚で、空隙があるため断面や平面でも数時間で乾燥し、色調が白色化し容易に区別できる。下層の樽前d2テフラは層厚が約1mで、詳細は表I-6に示したが色調及びパミスの粒度からⅦb①層～Ⅶb④層に細分し、Ⅶb①層はパミスの多くが風化粘土化し、やや粘質のある土壌となっているほか、緩斜面下方のI-6区基本土層トレンチにおいてはⅦb③が不整合に部分的な白色粘土（ハイロサイト）化がみられる。

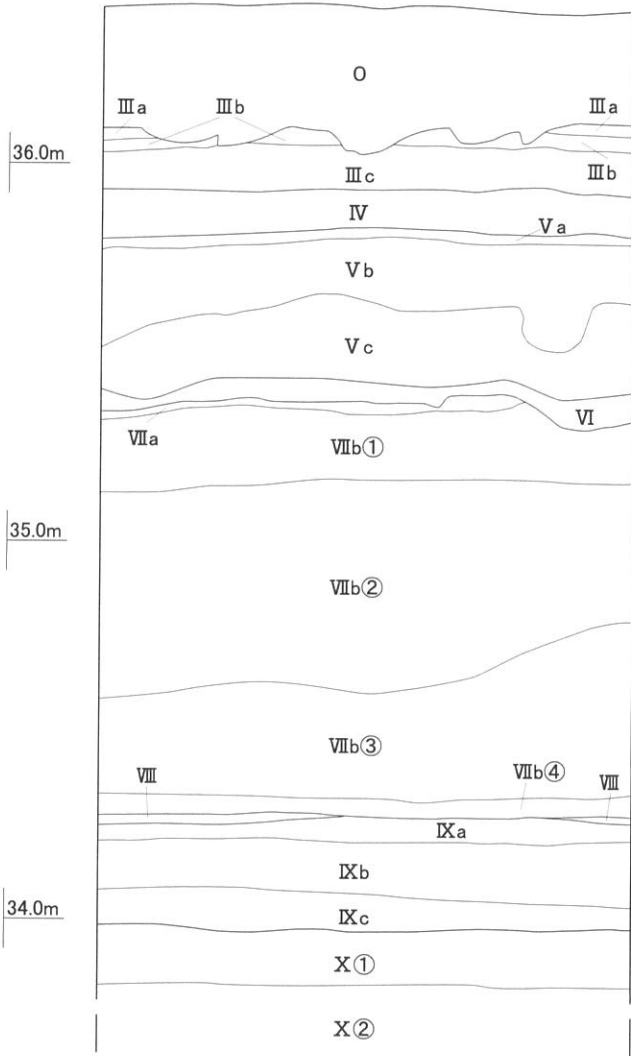
Ⅷ層は粘性の強いローム質土で、少量の炭化物を含み美沢川流域遺跡群等のⅢb層相当にあたる。締り、粘性が共に非常に強く不透水層となる。このため直上層のⅦb最下層は特に保水性に富み、過去の調査においても地下水脈を形成していることが多い。こうした不透水層の直上の樽前dテフラ中の水分量とそれぞれの土壌密度、締まり具合が共に大きく異なることが、2018年の北海道胆振東部地震における表層崩壊のすべり面となった要因と考えられる。

Ⅸ層は二次堆積の恵庭aテフラ（約20,000年前降下）を起源とする風化ローム層で、層厚は全体で約20cmあり、a～c層に分類した。Ⅸa層は僅かに粘性を有し、炭化物を微量に含み締りがなくボソボソしている。Ⅸb層はローム質に円磨度の高いパミスやシルト岩を微量に含む。Ⅸc層はローム質に砂を多く含み、下層の段丘礫層との漸移層である。

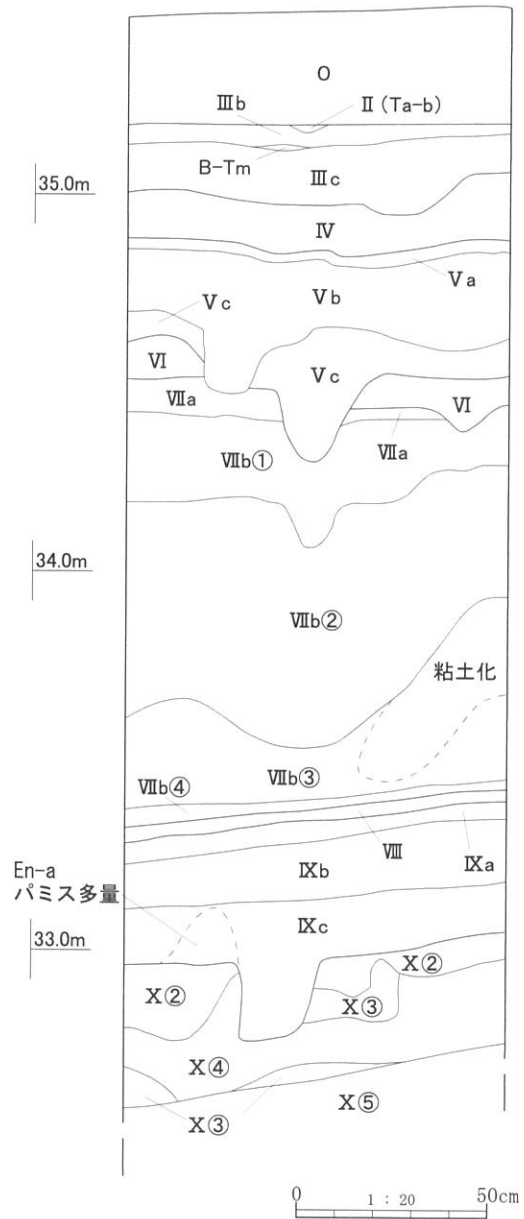
Ⅹ層は河岸段丘堆積層で①～⑤に細分している。本層は樽前dテフラから30cm下層に段丘礫層を確認しており、これが基盤層を被覆している。Ⅹ層は、一部にラミナが発達する砂層を基質とし、円磨度の高い恵庭aパミスとの互層が発達しており、水成堆積の特徴がみられる。Ⅹ層上位には砂-シルトの水成堆積ユニットが形成されていないことから、恵庭aパミス降下後の離水過程は急激な離水変化とみられ、恵庭aパミス降下によるイベント的な洪水堆積物の可能性がある。なお上位のⅩ①層には砂岩泥岩の垂角～円礫の扁平礫多く含むが、離水後の陸化において二次的に移動、集約化したものと思われ、インブリケーションは確認できていない。

（奈良・乾）

南東側壁面断面 (K・L-3区)



北側壁面断面 (I-6区)



土層断面記録位置図

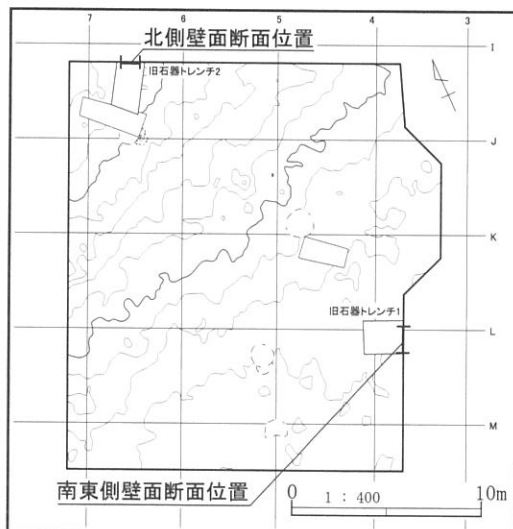


図 I-4 基本土層図

表 I-6 富里4遺跡基本土層

O層	7.5YR3/1	黒褐色	攪乱・耕作土 砂質土=Ta-b(φ20mm以下) 層厚30cm。
II層	2.5Y7/3	浅黄色	樽前bテフラ(Ta-b)細礫質降下軽石。1667年降下。
III層			黒色腐植土 新千歳空港(美沢川流域遺跡群)調査におけるI黒(ⅠB)層相当。
IIIa層	7.5YR1.7/1	黒色	砂質シルト 近世初頭アイヌ文化期遺物包含層。層厚2~3cm。
IIIb層	10YR2/1	黒色	シルト 上位は中世アイヌ文化期遺物包含層、下位は擦文文化期遺物包含層。下位において部分的に白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)が堆積。946年降下。層厚5cm。
IIIc層	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト 擦文文化期前期~縄文晩期後半遺物包含層。層厚9~12cm。
IV層	10YR5/6	黄褐色	樽前cテフラ(Ta-c) B.P.2,500年前降下。層厚9~13cm。
V層			黒色腐植土 新千歳空港(美沢川流域遺跡群)調査におけるII黒(ⅡB)層相当。
Va層	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト Ta-c斑状に含む。縄文晩期前半遺物包含層。層厚3~4cm。
Vb層	10YR1.7/1	黒色	シルト Ta-d ₁ スコリア(φ5mm以下)微量 縄文中・後期遺物包含層。層厚25~30cm。
Vc層	10YR2/2	黒褐色	シルト Ta-d ₁ スコリア(φ5mm以下)少量 Ta-d ₂ パミス(φ20mm以下)微量含む。縄文前・中期遺物包含層。層厚15~20cm。
VI層	10YR5/3	にぶい黄褐色	漸移層 Vc+Ta-d ₁ ≡Ta-d ₂ (斑状) 縄文早期遺物包含層。層厚5~8cm。
VII層			樽前dテフラ(Ta-d) B.P.約8,000~9,000年前降下。スコリア質のd ₁ と発砲性の軟質パミスの2層。層厚100cm。
VIIa層	10YR6/4	にぶい黄橙色	Ta-d ₁ φ10mm以下 層厚3~5cm。
VIIb①層	5YR4/8	赤褐色	Ta-d ₂ φ3~20mm以下の含水パミス(軟質、一部粘土化) 層厚15~20cm。
VIIb②層	5YR5/4	にぶい赤褐色	Ta-d ₂ φ3mm以下の含水パミス 層厚35~60cm。
VIIb③層	2.5YR5/4	黄褐色	Ta-d ₂ φ4mm以下の含水パミス 層厚30~50cm。
VIIb④層	2.5YR5/2	暗灰黄色	Ta-d ₂ φ50mm以下のパミス(硬質)=砂 層厚5cm。
VIII層	2.5YR3/1	黒褐色	新千歳空港(美沢川流域遺跡群)調査におけるIII黒(ⅢB)層相当。ローム質粘性強=炭化物。層厚1~2cm。
IX層			恵庭aテフラ(En-a) B.P20,000年前降下。風化ローム。
IXa層	10YR7/6	明褐色	ローム質土 ローム質(粘性有)≡炭化物 しまり弱い 層厚7cm。
IXb層	10YR6/3	にぶい黄橙色	ローム質土 ローム質=砂粒均質≡恵庭aパミス(En-a.p)円磨・シルト岩 層厚6~9cm。
IXc層	2.5YR7/4	浅黄色	ローム質土 ローム基質-砂:En-a.p円磨、部分的に多い 粘性弱い上層のローム質土と段丘層の漸移層 層厚5~7cm。
X層			河岸段丘堆積層 礫・砂~シルト・水成二次堆積のEn-a.p・風化ローム。
X①層	2.5YR5/2	暗灰黄色	礫層 礫(偏平)-砂=ローム質土 層厚15~35cm。
X②層	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂層 砂+ローム質土-En-a.p=礫 砂・礫・En-a.pが不揃いに混合 本層より下層が段丘堆積層を保持。層厚5~10cm。
X③層	2.5YR7/6	明黄色	砂層 砂=礫(φ5~30mm) 層厚5~10cm。
X④層	7.5YR6/6	橙色	砂層 砂=En-a.p(φ3~10mm、円磨) 上位細粒化し、水成堆積ユニット2枚 層厚15~20cm。
X⑤層	7.5YR5/2	灰褐色	砂層 砂≡En-a.p。

第Ⅱ章 近現代及び中世アイヌ文化期の調査

本章では0層とⅢ層で検出した遺構を対象に掲載した。0層については富里地区の近現代史を知る上で重要であることから、杭跡などの記録を行い、報告するものである。図Ⅱ-1に示したように、0層からは杭跡が8基、Ⅲ層からは焼土1カ所を検出した。遺構は調査区北東側に杭跡、東側に焼土が分布し、遺物は調査区中央から東側に土器、礫の広がりが見られた。

第1節 杭跡

杭跡は0層（耕作土）～Ⅱ層を重機で除去し、人力でⅢ層上面等の調査開始面を精査した段階で、径7～10 cmの0層やⅡ層が落ち込む円形プランを確認した。その後、周辺に同様のプランを検出したため、規模や配列などから同時期の遺構と判断して調査した。調査はⅢc層で全体配列の写真撮影を行った後、それぞれ半截し、断面の記録、完掘、平面の記録をして調査終了した。杭跡は、すべて打ち込みによるものである。傾きは直立から10°で、一定方向への傾斜は認められなかった。確認面からの深さはOKP-05（34 cm）と06（54 cm）を除くと20 cm前後が多い。杭跡の配列については2基1対が4対認められ、合計8基検出している。分布については2基1対が大きくL字状に配置されているが、これらすべてで構成するのか、調査区内の状況では利用目的等の詳細は不明である。構築年代は、いずれも覆土にTa-bを含むことから、これら杭跡はTa-b降下以降であり、プラウ耕が行われた昭和40年代との間での所産と思われる。

以下に対ごとに記載を行う。

OKP-01・02（図Ⅱ-2 図版2-1・2）

位置：J-3・4区 規模：01/上端9 cm 深さ18 cm 02/上端9 cm 深さ23 cm

確認・調査 最初に確認された杭跡で、軸方向を北西にして杭間隔は24 cmである。覆土は、01が上位にTa-b主体層、中位にTa-bと黒色土の混合層、下位にTa-b主体層と黒色土にTa-b・Ta-cの混じる層が堆積し、左壁側に木の根によるⅢc層の引き込みが見られる。02は上位に黒色土主体層、下位にTa-bと黒色土の混合層が堆積する。

OKP-03・04（図Ⅱ-2 図版2-3～6）

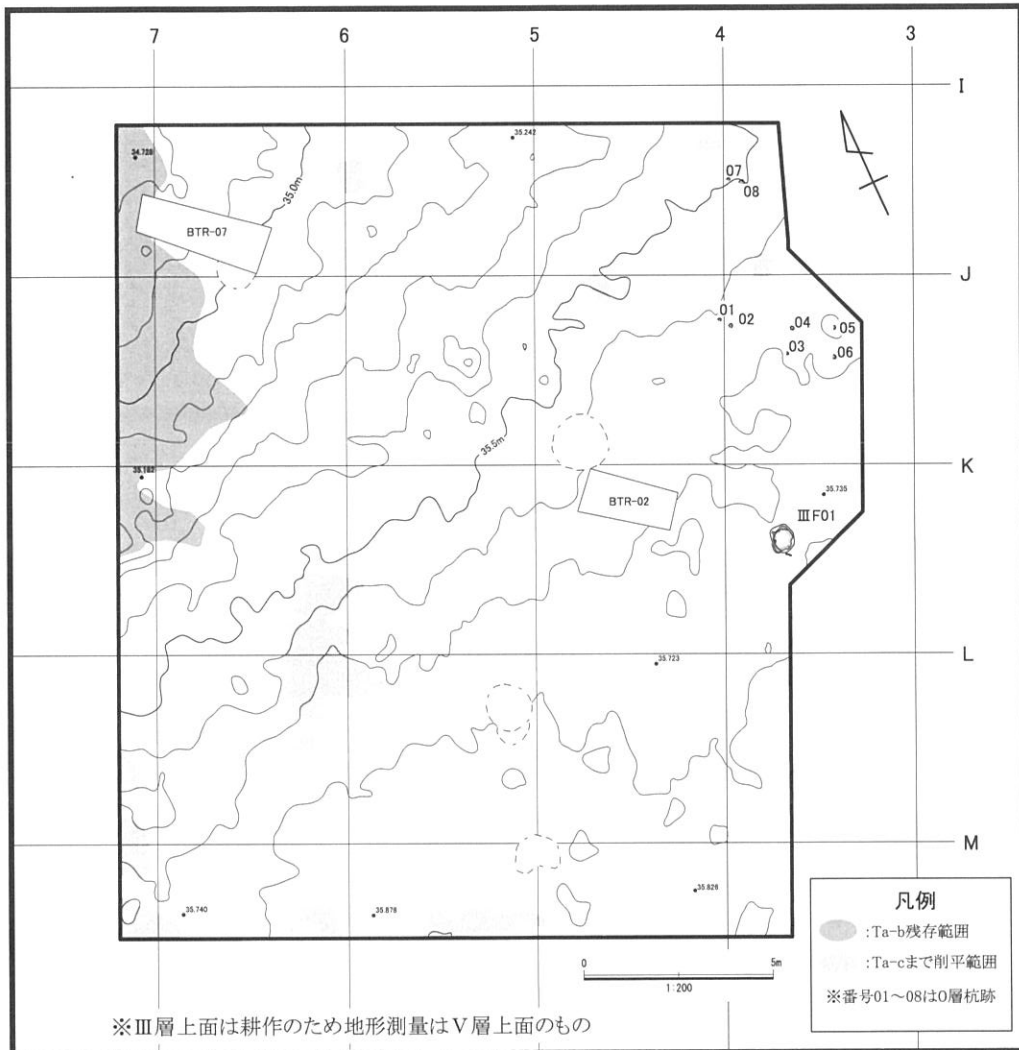
位置：J-3区 規模：03/上端7.6 cm 深さ19.4 cm 04/上端9.5 cm 深さ14 cm

確認・調査 02の東南約1.5m地点で検出した。軸方向を北北東にして杭間隔は60 cmである。覆土は、03が上位と下位にTa-b主体層、中位に黒色土主体層が堆積する。04は上位にTa-bと黒色土の混合土層、下位にTa-b主体層が堆積する。

OKP-05・06（図Ⅱ-2 図版2-7～10）

位置：J-3区 規模：05/上端11 cm 深さ34 cm 06/上端10 cm 深さ54 cm

確認・調査 04の東南1.0m地点で検出した。03・04と同じグリッド内である。軸方向を北北東にして杭間隔は70 cmである。03・04とほぼ平行に並び、2基の杭間隔もほぼ同様の規格である。06は54 cmの深さがあり、細長く深い。覆土は、05・06がとも近似した堆積を示し、上位にTa-b主体層、中位に黒色土主体層、下位に黒色土にTa-b・Ta-cの混じる層が堆積する。



図Ⅱ-1 O・Ⅲ層遺構配置図

O KP-07・08 (図Ⅱ-2 図版 2-11・12・3-1)

位置: I-3区 規模: 07/上端 9 cm 深さ 16.4 cm 08/上端 14 cm 深さ 25 cm

確認・調査 01の北東3.6m地点で検出した。軸方向を北西にして杭間隔は24cmである。覆土は、07・08は一部に黒色土主体のブロックがみられるが、Ta-b主体層が堆積する。01・02とは軸方向、2基の間隔が同じであり、覆土もTa-bが主体となる共通点が認められる。

第2節 焼土

検出した焼土は1カ所で、調査区南東側壁面付近の標高約36mの平坦部で確認した。周辺には他に遺構が認められず、遺物もほとんど出土しないことから単独の焼土と判断した。調査にあたっては灰層・焼骨片を含む土壌をフローテーション用サンプルとして採取した。同定試料の結果の詳細については第Ⅴ章第2節・第3節を参照されたい。

ⅢF-01 (図Ⅱ-3 カラー図版 2、図版 3-2・3)

位置: K-3区 規模: 長軸 78×短軸 61×厚さ 8 cm 検出層位: ⅢbM 平面形: 不整楕円形

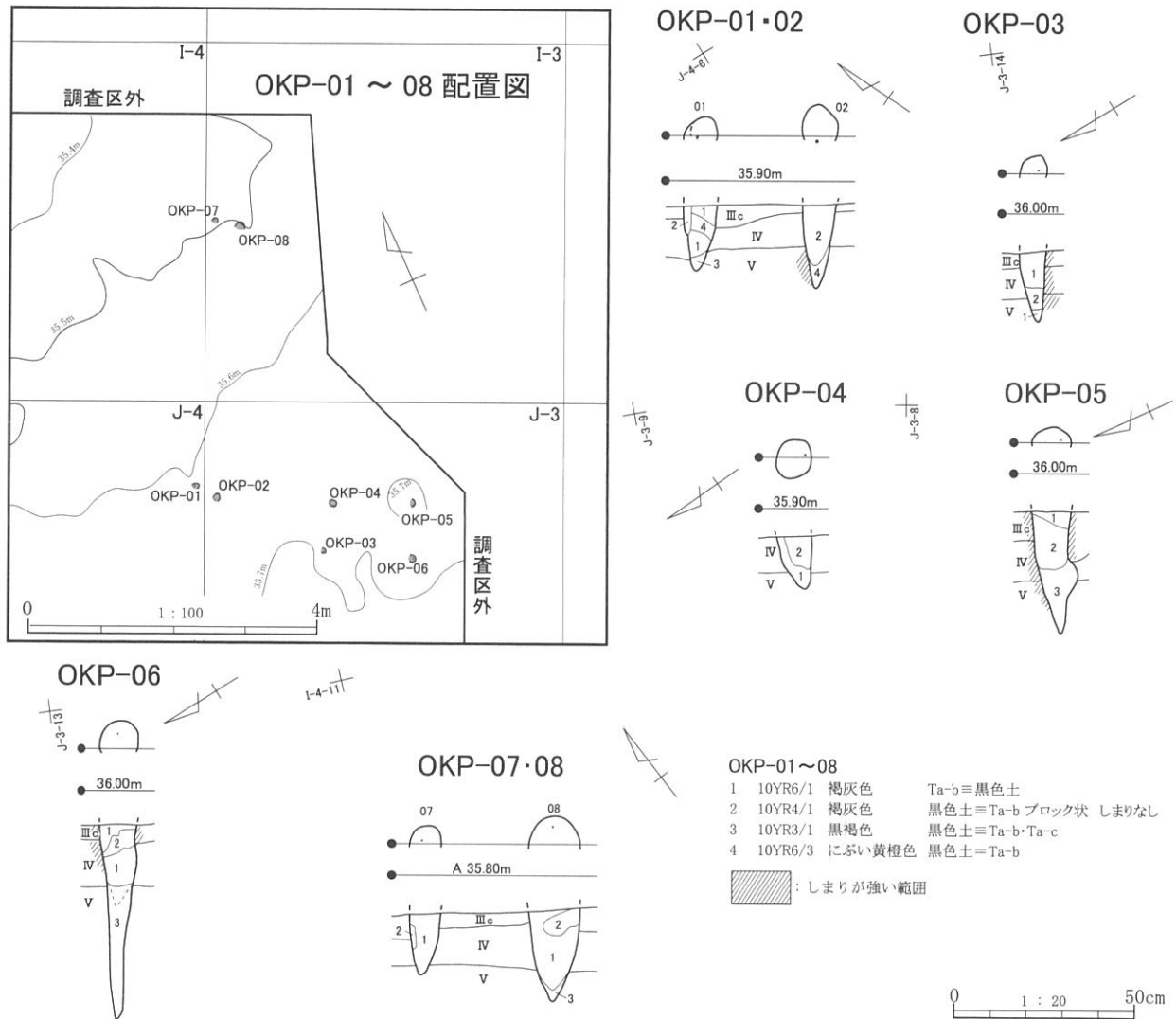


図 II-2 OKP-01 ~ 08 平面及び断面図

確認・調査 焼土はⅢb層中位で検出され、上位をプラウ耕による現代農法によって筋状に攪乱を受けている。Ⅲa層でわずかな焼土粒と焼骨片を確認したため、下位に焼土の存在を想定して観察用ベルトを設定し、掘り下げて焼骨片を伴う燃焼面を面的に検出した。調査は燃焼面の撮影、平面を記録した後、長軸中央に幅 10 cmのベルトを残して燃焼面断面を撮影、実測を行い、サンプルを採取した。その後、検出した被熱面を同様に記録し、半截して断面の記録を行い、終了した。焼土は長軸方向を北東にもつ地床炉で、不整な楕円形プランを呈し、中央が浅くくぼむ。焼土周縁には幅 5~12 cmの付帯黒色土が形成されている。なお、燃焼面からは魚骨を主体とする焼骨片や炭化種子が出土している。本焼土の燃焼面より上層の黒色土Ⅲb層から未被熱の礫片が 1 点出土している。調査の過程上、本焼土の遺物として取り上げたが、焼土には伴わない可能性もある。帰属時期は、Ⅲa層を 2 cm、Ⅲb層を 1 cm掘り下げた段階で、燃焼面の全体プランが確認できたことと、西暦 946 年降下の白頭山-苫小牧テフラ (B-Tm) の小塊が焼土地山被熱層 (3 層) 中に確認できたことから 10 世紀中葉以降の形成と判断した。また、層位的にもⅢb層中位に形成されていることから中世アイヌ文化期と考えられる。

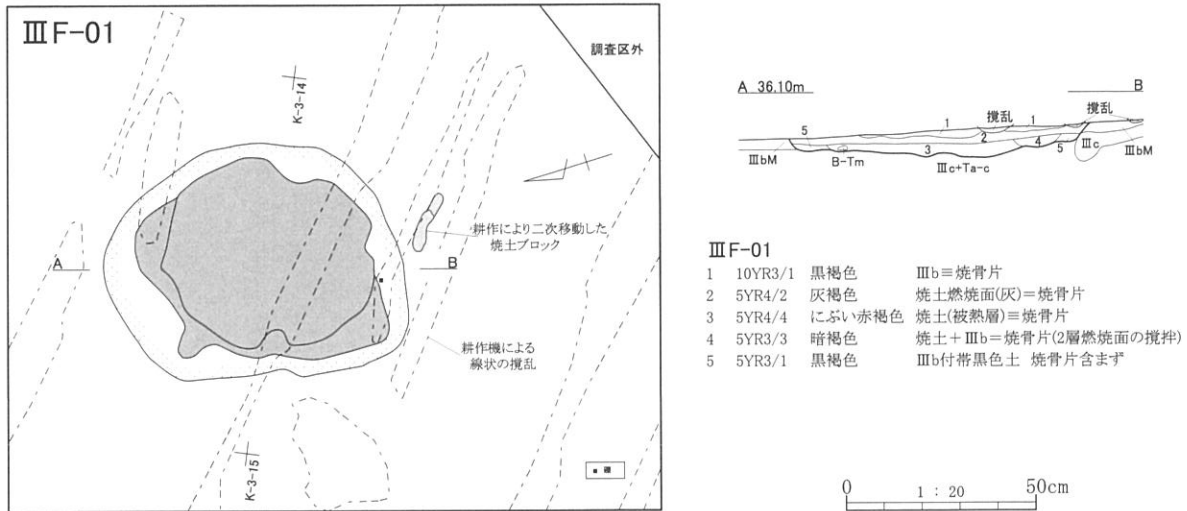


図 II-3 III F-01 平面及び断面図

第3節 包含層出土遺物

今回の調査ではⅢ層包含層から土器7点、礫14点が出土した。土器はK-4区のⅢbM～Ⅲc層で出土したが、縄文時代晩期後葉の第V群C1類に属するもので、VPB-01の分布域と重複し、文様・胎土から同一個体と考えられる。このため、第Ⅲ章第2節の土器集中で記載する。

本節では調査区外であるが、本遺跡のⅢ層出土遺物の参考資料として試掘坑No.1で出土した礫石器1点を掲載する。

1. 礫石器

滑沢面のある礫 (図 II-4 図版 8-1)

偏平な隅丸三角形の転礫素材の砂岩を用いている。表面の周縁は下縁を除き、自然面を残す。中央から下端にかけては浅くくぼみ、2面の滑沢面がある。表面下半の左右には斜位の線条痕がみられる。下縁全体には敲打痕があり、特に右半分の側縁稜には敲打痕とこれに伴う剥離がみられ、たたき石としても利用されている。裏面は素材礫層理面で大きく剥落している。

(工藤)

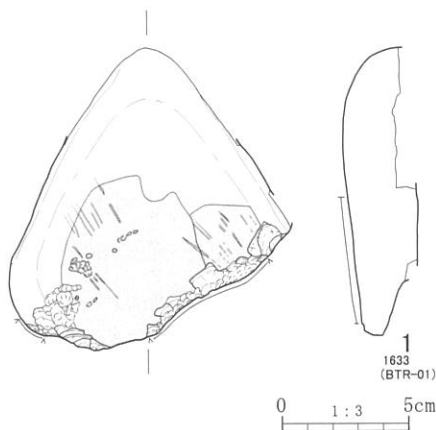


図 II-4 Ⅲ層包含層出土礫石器

表II-1 O層杭跡属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
					上端	下端	深さ			
II-2	2-1・2	OKP-01	J-4	0	9.0	0.0	18.0	3°	打込み	02と一対
II-2	2-1・2	OKP-02	J-3	0	9.0	0.0	23.0	1°	打込み	
II-2	2-3・4	OKP-03	J-3	0	7.6	0.0	19.4	5°	打込み	04と一対
II-2	2-5・6	OKP-04	J-3	0	9.5	0.0	14.0	10°	打込み	
II-2	2-7・8	OKP-05	J-3	0	11.0	0.0	34.0	5°	打込み	06と一対
II-2	2-9・10	OKP-06	J-3	0	10.0	0.0	54.0	0°	打込み	
II-2	2-11・12	OKP-07	I-3	0	9.0	0.0	16.4	2°	打込み	08と一対
II-2	2-11・12 3-1	OKP-08	I-3	0	14.0	0.0	25.0	0°	打込み	

表II-2 III層遺構属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	平面形	調査面 層位	調査面規模(cm)		厚さ (cm)	長軸 方向	備考
				調査面		長軸	短軸			
II-3	カラー図版2 3-2・3	III F-01	K-3	不整楕円形	III bM	78.0	61.0	8.0	N-18° -E	焼骨片・付帯黒色土有り

表II-3 III層包含層出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	遺構/ グリッド	層位	規模(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
II-4	8-1	-	1633	滑沢面のある礫	-	BTR-01	III	(120.9)	112.9	31.8	(386)	Sa.	たたき石併用

表II-4 III層包含層出土礫属性表

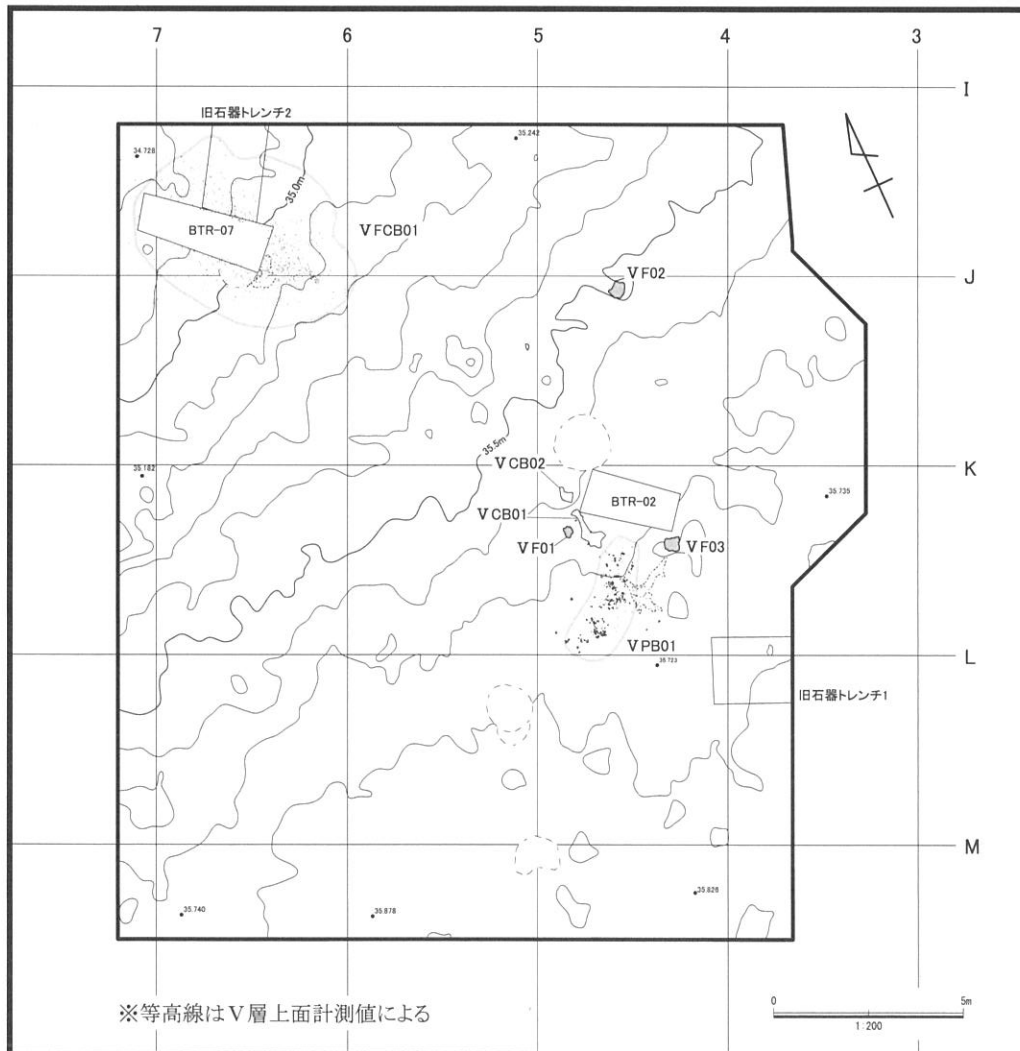
図版 番号	個体 名称	遺物 番号	グリッド	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差					
-	-	23	J-6	III bM	完形	47.1	-6.9	19.1	-9.3	13.7	-2.3	2.5	0.5	18.01		Cha.
-	-	25	K-3	III bM	破片	(56.4)	2.4	(34.5)	6.1	(14.5)	-1.5	1.6	-0.4	(31.10)		Mud.
-	-	1607	K-3	III a	破片	(63.4)	9.4	(26.5)	-1.9	(14.6)	-1.4	2.4	0.4	(20.29)		Mud.
-	-	15	K-4	III bU	破片	73.3	19.3	(28.6)	0.2	24.9	8.9	2.6	0.6	(70.40)		Mud.
-	-	16	K-4	III bM	破片	(27.0)	-27.0	(30.0)	1.6	(11.3)	-4.7	0.9	-1.1	(11.71)		Sa.
-	III S002	17-1 18 19 26	K-4	III bM	破片	(67.5)	13.5	(30.7)	2.3	(17.7)	1.7	2.2	0.2	(32.10)		Mud.
-	-	17-2	K-4	III bM	破片	(24.4)	-29.6	(8.5)	-19.9	(8.6)	-7.4	2.9	0.9	(1.04)		Mud.
-	-	20	K-4	III bM	完形	60.2	6.2	39.1	10.7	23.2	7.2	1.5	-0.5	45.74		Mud.
-	-	21	K-4	III bM	完形	65.3	11.3	33.6	5.2	11.6	-4.4	1.9	-0.1	35.88		Sa.
-	III S001	22 27	L-4	III bM	破片	(55.6)	1.6	32.9	4.5	(19.6)	3.6	1.7	-0.3	(28.35)	○	Sa.
平均						54.0		28.4		16.0		2.0		29.5		
合計														294.6		

第三章 縄文時代の調査

本章ではV層で検出した遺構、遺物を対象としているが、土器の一部はⅢ層出土で、V層土器集中と同一個体の破片を本章に含めた。遺構は焼土3カ所、炭化物集中2カ所、土器集中1カ所、フレイク・チップ集中1カ所を検出した(図Ⅲ-1)。遺構の分布は調査区中央東側の土器集中周辺で焼土と炭化物集中が近接しており、フレイク・チップ集中はこれより8m北側の調査区北端に検出している。時期は焼土、炭化物集中、土器集中は縄文時代晩期後葉、フレイク・チップ集中は中期前半である。遺物の分布は土器集中周辺とその東側にみられ、他のグリッドは散発的な出土である。

第1節 焼土・炭化物集中

焼土及び炭化物集中は調査区北東で検出したVF-02を除き、VF-01・03、VCB-01・02を土器集中(VPB-01)の北と北東側周辺でまとまって検出した。焼土はフローテーション用サンプルとして採取し、試料同定を依頼したが、報告の結果では炭化種子の出土はなかった。



図Ⅲ-1 V層遺構配置図

1. 焼土

VF-01～03 (図Ⅲ-2 図版 4-1～6)

01 : 位置 : K-4 区 規模 : 長軸 31.5×短軸 22×厚さ 5 cm 検出層位 : VbU 平面形 : 不整形

02 : 位置 : J-4 区 規模 : 長軸 47×短軸 36.5×厚さ 5 cm 検出層位 : VbM 平面形 : 不整形

03 : 位置 : K-4 区 規模 : 長軸 39.5×短軸 37×厚さ 10 cm 検出層位 : VbU 平面形 : 不整形

確認・調査 VPB-01 の北側周辺を調査中に、北側 1.0m 地点 (01) と北東側 0.8m 地点 (03) に不整形の暗赤褐色のプランを確認した。検出面には焼骨片など認められず、掘り上げ土の可能性も考えられることからトレンチを設定し、断面確認を行った。断面観察で暗赤褐色が Vb 層中に皿状の被熱層が確認できたことから焼土と判断し、VF-01・03 を付番した。なお、VF-02 においても同様の手順で調査している。調査は平面の撮影及び図化をした後に、燃烧面のフローテーション試料のサンプリングを行い、半截して断面の諸記録をもって調査を終了した。検出は VF-01・03 が Vb 層上位、02 は Vb 層中位で地山被熱層を検出し、焼土燃烧面を削ってしまっているため本来の焼土形成面は Va 層の可能性がある。01 は VbU 被熱層(弱)に、02 は VbM 被熱層(強)に、ともに Ta-c を微量に含み、焼骨片・炭化物は含まない。03 は上位が Vb 被熱層に Ta-c を少量、下位が Vb 被熱層に Ta-d1・d2 を少量と Ta-c・炭化材を微量に含む。焼骨片は確認されていない。

帰属時期は VF-01・03 が近接する VPB-01 とほぼ同一層位であるため、土器型式から縄文時代晩期後葉と思われる。また、VF-02 は周辺に遺構遺物は確認されていないので、帰属時期の判断は難しいが、層位的には VF-01・03 と同時期と思われる。

2. 炭化物集中

VCB-01・02 (図Ⅲ-2)

01 : 位置 : K-4 区 規模 : 121.5×49.5 cm 検出層位 : Va 平面形 : 不整形

02 : 位置 : K-4 区 規模 : 48×32.5 cm 検出層位 : Va 平面形 : 不整形

確認・調査 VPB-01 周辺を精査中、北側に炭化物の分布が認められた。範囲を確認するため周辺を掘り下げたところ、南北軸に細長い不整形プラン (01) と、さらにその北側 0.25m の地点に不整形プラン (02) を確認した。調査は平面の撮影及び図化を行い、フローテーションサンプルを採取して終了した。層厚についてはサンプル採取時に 2～3 cm と記録しているが、図化はしていない。範囲内からは厚さ 0.5～1.0 cm の炭化材のみが確認され、01 の下位から土器が出土しているが、焼土や焼骨片などは認められない。

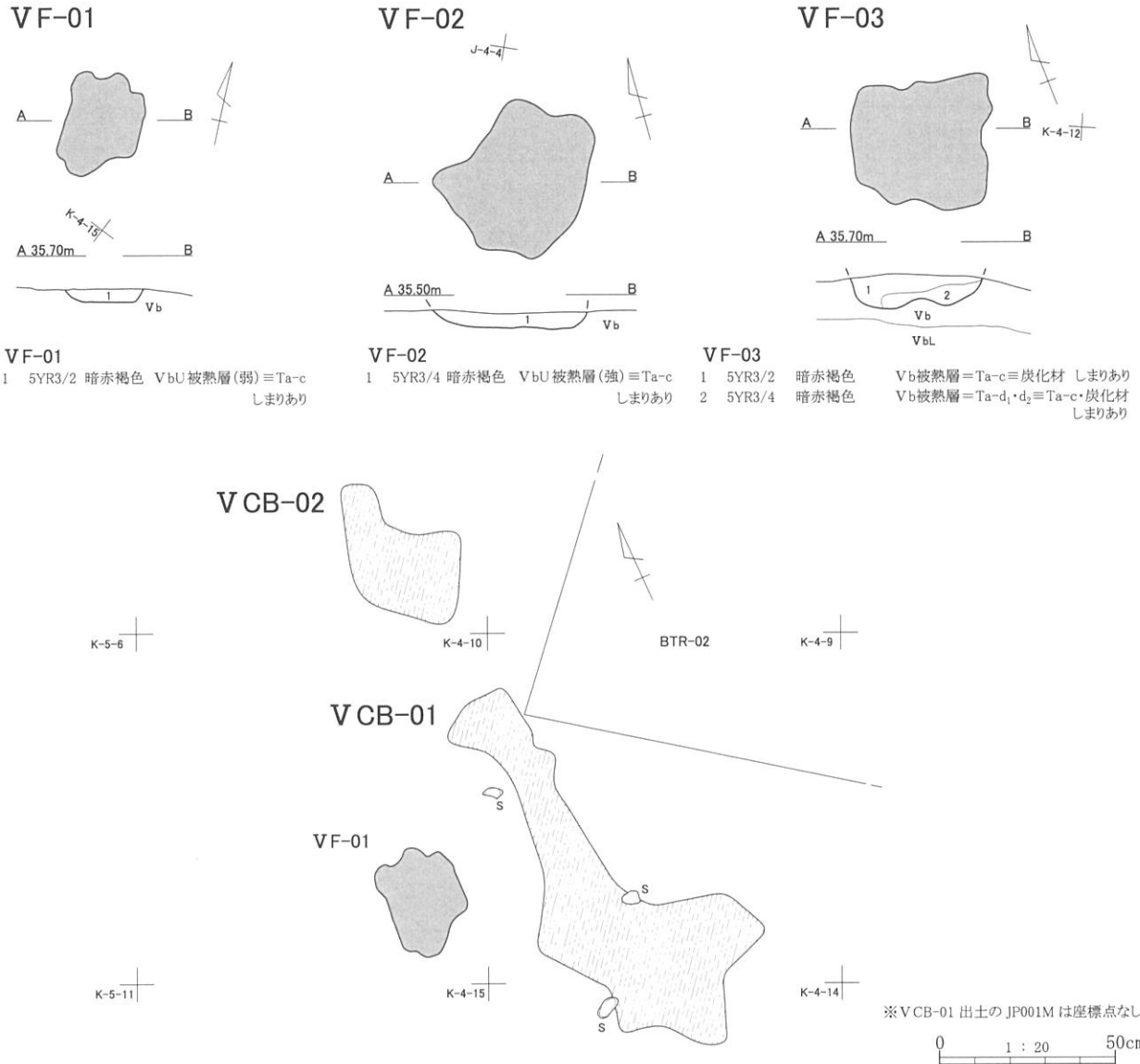
帰属時期は検出層位や VPB-01 との位置関係、V 群 C1 類土器が出土していることを考慮すると、VPB-01 と同じ縄文時代晩期後葉と考えられる。

出土遺物 (図Ⅲ-5-3 図版 7-3)

出土土器 2 点のうちの VCB-01 から出土した 1 点は、胎土と内面調整の状態から判断し、南側に隣接する VPB-01 出土個体と同一個体と思われる。

V 群 C1 類土器 (3)

表面が剥落した、やや外傾する深鉢の胴部下半で、内面はミガキ調整である。



図Ⅲ-2 VF-01～03・VCB-01・02 平面及び断面図

第2節 集中出土遺物

調査区中央東側の平坦面で土器集中 1 ヲ所、調査区北端の緩斜面でフレイク・チップ集中 1 ヲ所を検出した(図Ⅲ-1)。各集中内には他の遺物はほとんど混在しておらず、VPB-01 周辺に焼土(VF)や炭化物集中(VCB)が認められるのみである。

1. 土器集中

VPB-01 (図Ⅲ-3、5-1・2 図版 4-7・8、5-1、7-1・2)

位置:K-4 区 規模:334×142 cm 検出層位:Va 平面形:不整形

確認・調査 検出は層厚 10 cm 前後あるIV層(Ta-c)を重機で除去中にIV層直下で土器片が数点出土したことによる。分布状態を面的に確認した結果、Va層を主体とする土器片の集中であることが認められ、分布範囲は長い不整形で、長軸方向は北東-南西軸である。本集中の北側にVF-01とVCB-01・02、北東側にVF-03、東側に根痕を検出している。調査は全体検出の後、撮影を行い、2 cm以上の破片は微細図に図化するためにトータルステーションで輪郭を記

録した。この輪郭線を元に、土器片の表裏面や傾き等の詳細情報を微細図に反映させ、1点ずつ取り上げた。一部重複している土器については細片取り上げ後に再度、出土状態の撮影と図化を行っている。

分布状況は北東-南西方向に長く広がり、中央は濃密で直径約80cm内に集中し、北東側と南西側はやや広く薄く散逸している。土器片の部位別分布をみると、口縁～胴部片は全体に、底部片は中央に多くみられる。上位で出土した破片は器表面を上向きにして小型や細片が多く、下位では中型・大型の破片が内面を上に向けた状態で15点ほど出土した。なお、Ⅲ層出土の同一個体片は細片で出土点数少ないものの、ほとんどが底部片である。これらの出土状況から、なんらかの原因で底部片の一部がⅢ層へ上がったと思われる。なお、東側に隣接する根痕は軟質の黒色土を主体にTa-bを少量含み、土器の出土は確認されなかった。このことから根痕は、隣接するVPB-01とは直接関係がないものと判断した。帰属時期は出土土器がV群C1類に属することから縄文時代晩期後葉である。

遺物整理に関しては、発掘現場で水洗-乾燥-注記まで終了し、接合作業は整理事務所室内で、まず取り上げた袋内ごとに細片の接合を行い、口縁部から胴部の文様等の分かる大型の破片同士の展開接合を行った。その後、大小の各部位と文様、色調、剥落状態、付着物を観察して振り分け、近似する土器片同士の接合と大型の破片への接合を続けた。ある程度復元でき、撮影、拓本等に抽出したものについては、エポキシ系樹脂「バイサム」で補強、復元した。

出土遺物

VPB-01からは土器947点の出土があり、Ⅲ層出土を含めると954点である。個体数としては1個体分である。この他礫10点の出土があった。

土器 (図Ⅲ-3、5-1・2 図版7-1・2)

V群C1類 (1・2)

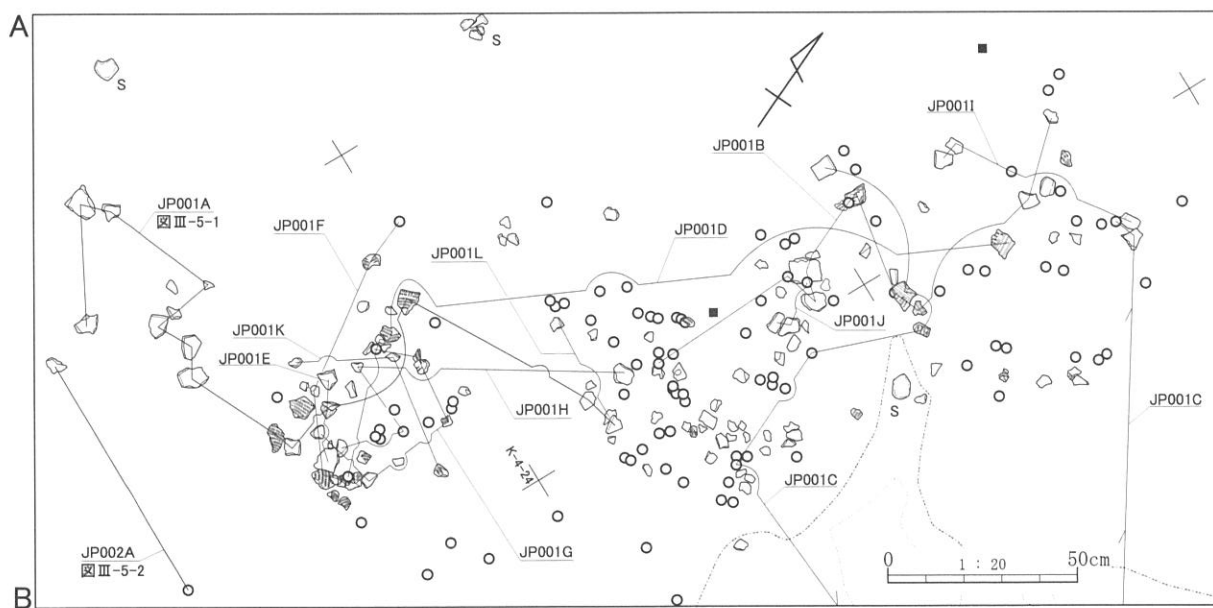
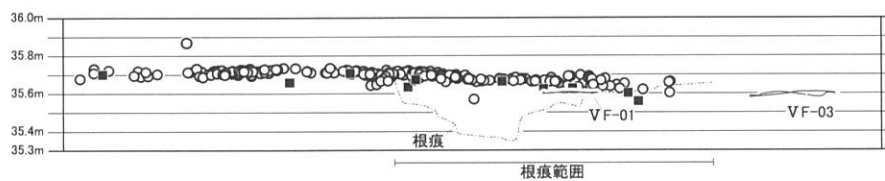
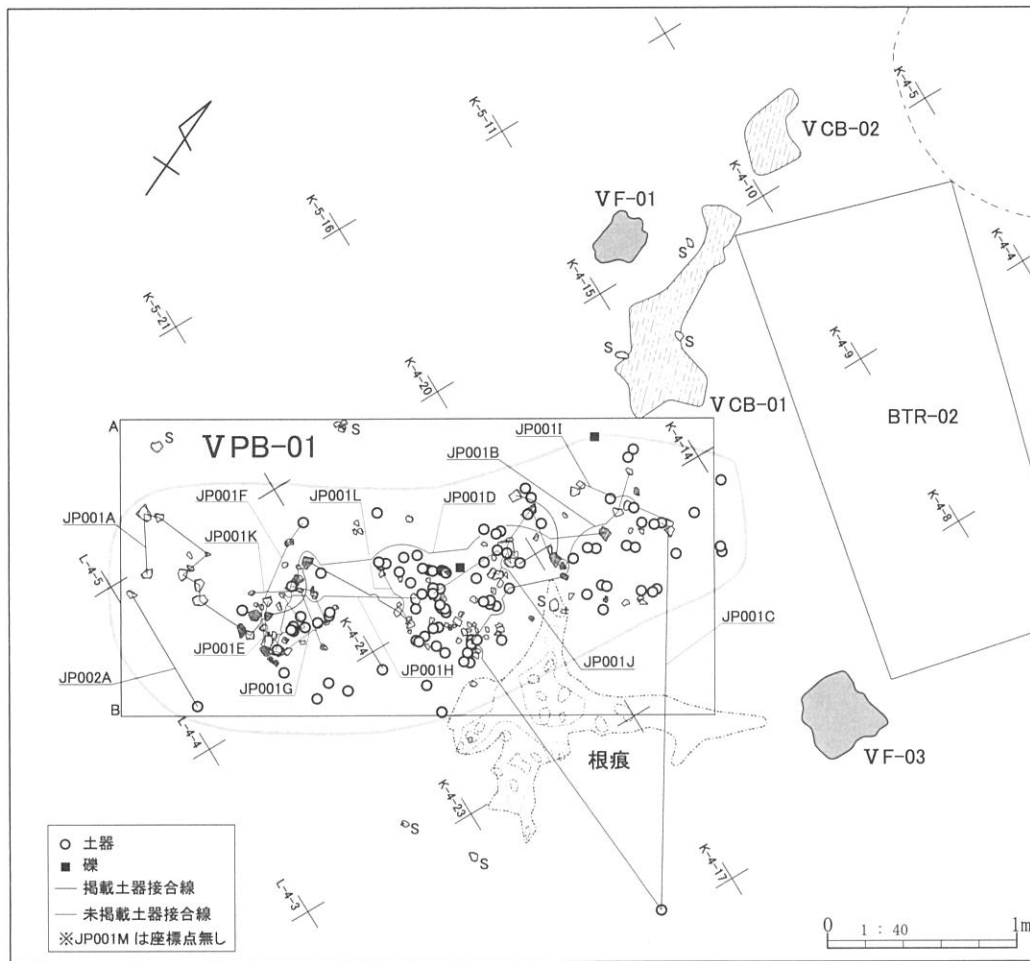
1は、口縁部から底部片に至るほぼ1個体分の出土があったが、細片が多く完形復元まで至らなかった。文様はRL斜行縄文の地文の口縁部に4条の平行沈線文を施文した深鉢で、口唇直下は無文帯である。器形は胴部下半がやや外傾し、上半で直立して口縁部でやや内湾ぎみに立ち上がる。口唇断面は内削ぎの切り出し状である。底部は細片のみで復元できなかったが、底面は少し丸みをもつ。内面はミガキ調整で、口縁部が斜め、胴部を横方向に行っている。胎土は砂粒を中量含み、破損状況及び接合より成形時の粘土帯幅は約7cmと思われ、内傾接合であった。2は2点接合の外傾する深鉢の胴部下半である。RL斜行縄文を施文し、下半は無文であり、底部側面の可能性がある。内面は全体が剥落している。

2. フレイク・チップ集中

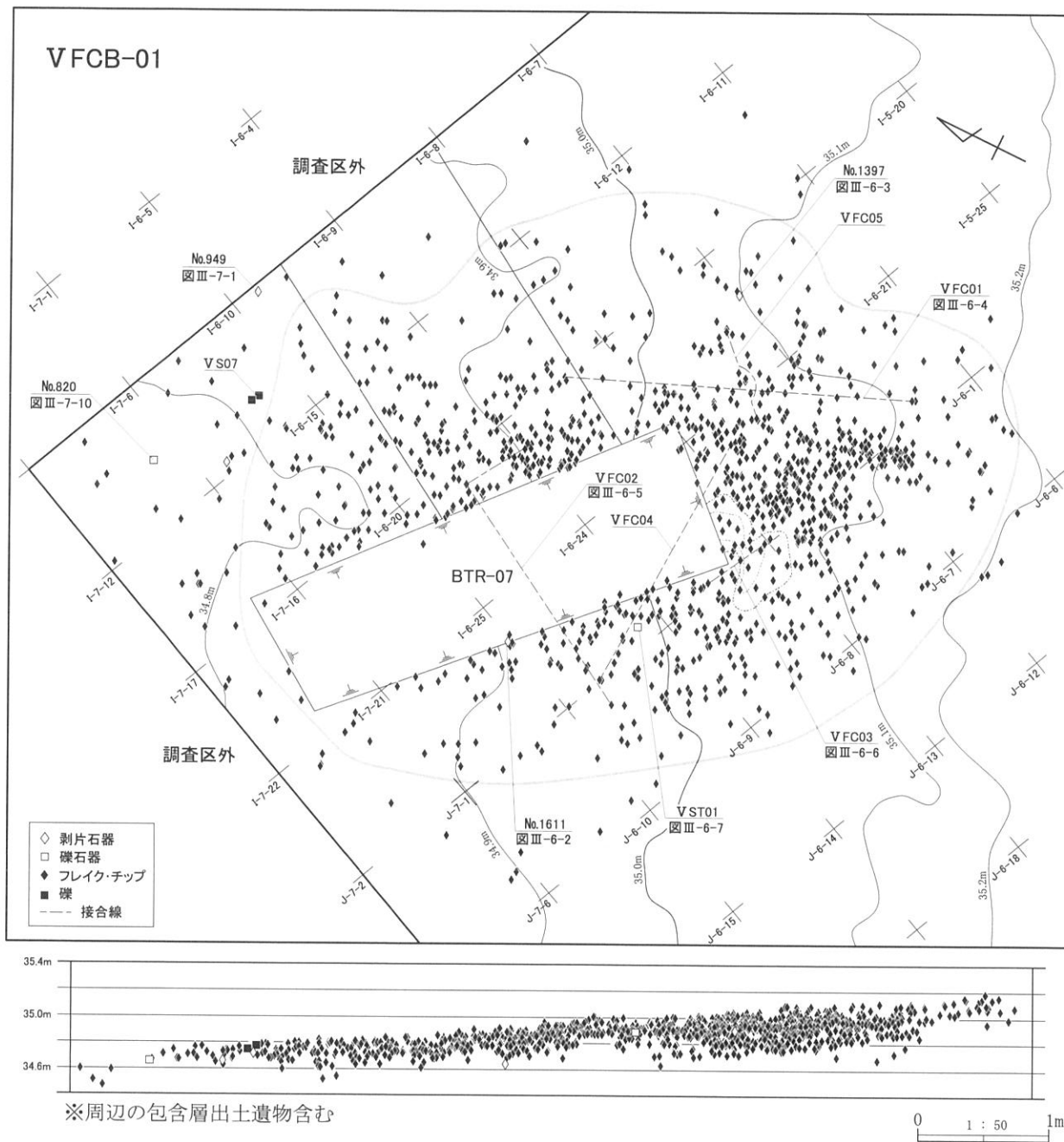
VFCB-01 (図Ⅲ-4、6-1～7 図版5-2・3、7-4～10)

位置:I-5～7区、J-5・6区 規模:610×437.5cm 検出層位:Va～Vc

確認・調査 本集中は試掘調査で試掘坑No.7よりフレイク・チップが23点出土していることから遺物が多く出土することが予想されていた。調査はI-6区の東側より緩斜面に沿ってVa層から1～2cmずつ掘り下げ、これを繰り返した。掘り下げ途中でI-6区の東と南の境界付近でもフレイク・チップの出土が顕著になったため、隣接するI-5区西側とJ-6区北側を50cm幅で拡張し、同様に調査を進めた。細片は紛失を防ぐためチャック付きポリ袋収納した後に出土地



図Ⅲ-3 VPB-01平面・垂直分布図及び周辺遺構配置図



図Ⅲ-4 VFCB-01 平面及び垂直分布図

点に竹串で刺し、1 cm以上の破片は竹串のみを刺して、フレイク・チップの分布域を確認した。面的に分布範囲を確認した後、撮影、取り上げを行った。これら一連の工程をフレイク・チップが出土しなくなるまで行って調査を終了した。集中範囲については整理作業で、トータルステーションの記録による遺物点から遺物分布の濃淡を確認した。その結果、北西側の傾斜下方へ漸移的に減じる分布傾向があり、I-6-18・19区に小規模な集中がみられたものの、全体で6.1×4.4m、最も集中する部分はI-6-22区付近の2.0×1.5mである。出土層位はVa～Vc層で、下位に大きいサイズの削片が多くみられる。出土点数は1,111点で、最も出土する層はVc層の455点で40.9%を占め、次いでVbL層の357点、32.1%が続く。サイズは最小で3mm弱、

最大で35.6mmある。重量はデジタル重量計で検知できない0.02g以下から13g未満まであり、総重量は348.64gである。材質はすべて黒曜石で、流紋岩を多く含む赤井川産が主体で、約6個体の母材を確認した。接合作業の結果、5点の接合個体(FC01~05)を確認した。接合関係においては特段の傾向はみられず、最長の接合距離は約2.8mであった。石器は試掘坑No.7出土の2点を含め4点が出土した。

帰属時期は全体の4割を占めるVc層に主体をもつことから、出土層位から縄文時代前・中期が想定でき、隣接するI-6-9区Va層の出土であるが、縄文前期に帰属すると思われる無茎三角形鏃(図III-7-1)が出土し、I-7-6区では当該期の礫石器である北海道式石冠が出土していることも根拠になりえる。また、調査区内で10m以上離れているがK-3区とL-4区でⅢ群A1・A2類の円筒上層式系土器が出土しており、縄文時代中期前半に帰属する可能性もある。

出土遺物

石器はポイント類、たたき石、R.F、U.Fの各1点が出土した。ポイント類とたたき石は、試掘坑No.7から出土であるが、本集中に関連するものとして掲載する。

剥片石器(図III-6-1~3 図版7-4~6)

ポイント類(1)

B2類に属する石槍で、茎部から鏃身部にかけて緩くカーブする茎部片である。両面に粗い剥離整形を施し、横断面は凸レンズ状である。側縁稜が整然とせず、未製品の可能性もある。

R.F(2)

平面形が洋梨状を呈する。表面の左下端部に岩屑面、右側縁上部には素材剥片の剥離面を残す。右側の下端部は欠損しているが、裏面主剥離面から鈍角な剥離調整が施されている。裏面は素材剥片の主剥離面を広く残し、右側上部に粗い剥離が施され、素材剥片の打瘤切除の調整の可能性がある。なお、表裏面それぞれ左側縁には連続した微細剥離がある。

下端部右半分が欠損しているものの全体の平面形や下端部の調整、刃縁の角度よりナイフ・スクレイパー類B2(エンドスクレイパー)の可能性もある。横断面は表面への凸レンズ状である。石材は筋状の流紋岩粒が入る黒曜石。

U.F(3)

平面が三角形を呈し、側面観は表面側に若干湾曲し厚みのある剥片を素材としている。表面の右側縁に使用の結果生じたと思われる連続する微細剥離がある。素材剥片の上面は打面で裏面上端に高い打瘤があり、バルバスカーが残る。なお、下端部の素材剥片の折損面には不連続の微細剥離があることから、本資料を完形品と判断した。石材は漆黒の黒曜石。

接合フレイク(図III-6-4~6 図版7-7~9)

フレイクの接合を行った結果、5点の接合個体を確認できた。そのうち3点を掲載した。

FC01(4) 縦長剥片2点が接合した資料で、いずれも上端面を打面としている。表面に岩屑面と右左横方向からの古い剥離痕を残している。側面観は剥片下端部が大きく湾曲している。

FC02(5) 3点が接合した薄手の縦長剥片で、うち2点は打点部分の上半部が折損しているものの、いずれの3点も上部から打撃を加えている。母材石質は透明度が高い基質に筋状の漆黒が入る黒曜石。

FC03 (6) 3点接合したもので、いずれの剥片も打点を上端面としている。表面下端と両側縁に平らな岩屑面を残し、下面は裏面側からの遠い打点の剥離面を残している。筋状の流紋岩粒が入る黒曜石。

礫石器 (図Ⅲ-6-7 図版 7-10)

たたき石 (7)

試掘坑No.7 から出土した下半部と接合した凝灰岩製で、I群 B2類に属する。棒状礫を用いたもので、右側縁上半の側縁稜に敲き潰れの幅が8mmほどあり、裏面には敲打に伴って生じた剥離がみられる。

第3節 包含層出土遺物

V層包含層からは、土器 16点、剥片石器 4点、礫石器 12点、FC1点、石斧石器群削片 1点、礫 164点の 198点が出土した。分布はVPB-01周辺とその東側の調査区平坦面にやや多く、調査区中央から西側の緩斜面は希薄である。出土層位はVb層中位～下位が主体を占める。

1. 土器 (図Ⅲ-5-4～14 図版 8-2～12)

土器は試掘坑No.1 から 3点、試掘坑No.7 から 1点出土し、V層包含層と合わせて主なものを掲載する。

I群 B3類 (4)

試掘坑No.7 出土で、ほぼ直立する深鉢の胴部上半である。横位の微隆起線文を貼り付け、上半に自縄自巻のRL斜行縄文、下半に横位のR撚糸を原体軸右巻きの撚糸文を施文している。

Ⅲ群 A1類 (5)

深鉢の外反する口縁部片である。M状突起を有し、突起頂部から垂下する貼付文の剥落痕があり、その両側にはRL縄線文を斜位と水平に施文している。内面は入念なミガキ調整が施されている。胎土に繊維を少量含む。

Ⅲ群 A2類 (6)

深鉢の口縁部片で、口唇部断面形が三角形状に肥厚する。鋸歯状構成の貼付文にR撚糸圧痕文を施文し、肥厚帯直下は無文である。内面は横方向の入念なミガキ調整が施されており、胎土に繊維を微量に含む。

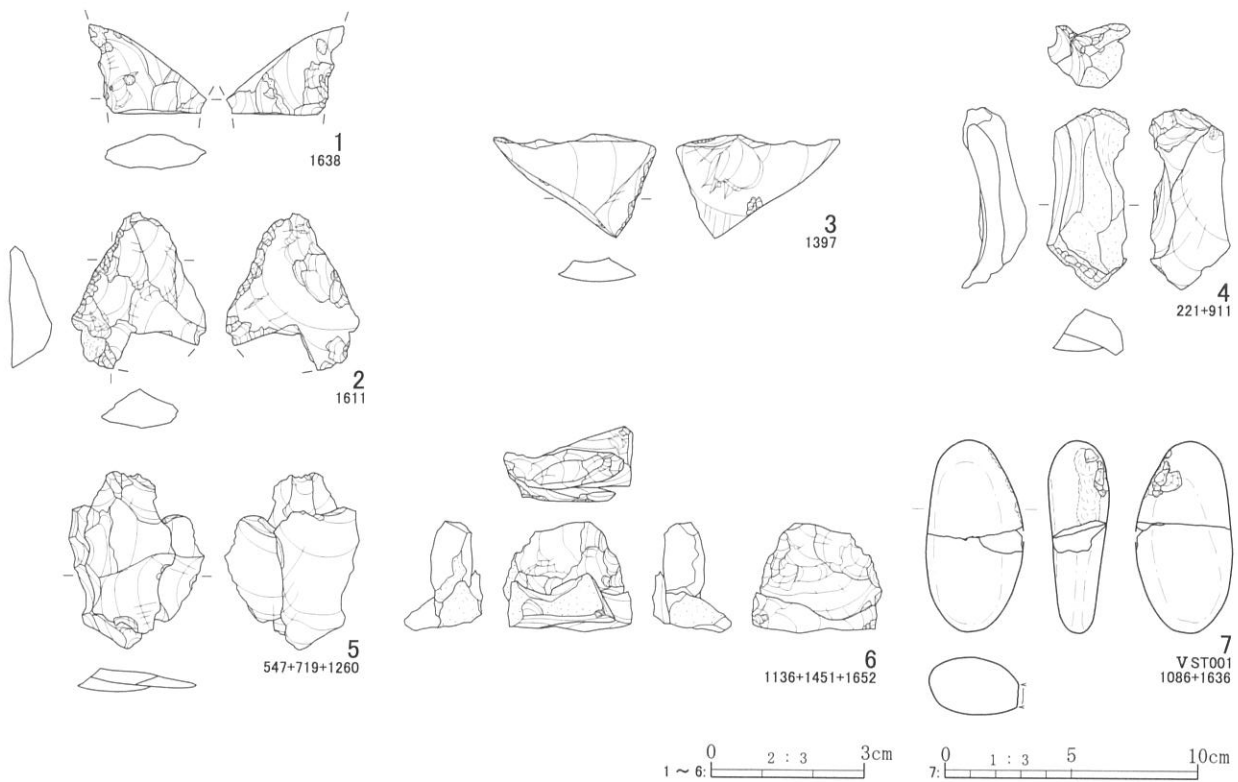
V群 C1類 (7～14)

8・9は試掘坑No.1出土である。7～11は深鉢で、色調や内径、傾きより7は胴部上半、8～11は胴部下半で、地文縄文のみの破片である。7はRL斜行縄文を主体とするが、一部の条が縦走気味となる施文単位もある。8は上半にRL斜行縄文を施文し、下半は無文である。器表面は赤褐色を呈し、使用時の被熱によると想定され、内面には炭化物が付着している。内径カーブも狭いことから底部側面の破片の可能性がある。9は器表面が風化しているが縦位のLR斜行縄文を施文していると思われる。成形時の粘土帯接合面で破断し、内傾の接合を示している。10は縦位のRL縄文を施文する。内面には炭化物が付着している。11はRL斜行縄文施文で、内面は入念なミガキ調整が施されている。12は深鉢の底部片で、立ち上がりは隅丸角状を呈し、底面は突底状である。底部側面はRL斜行縄文、底面は羽状のRL縄文を施文する。11・12はともに胎土に石英結晶粒を含む特徴から富良野盆地系の土器である。13は浅鉢の口縁部片で、口唇部

は切り出し状である。口唇には R 撚糸文、口唇外端には刻みを施し、器表には縦走気味の RL 斜行縄文を施文している。14 は浅鉢の胴部上半で、RL 斜行縄文を施文している。13・14 の内面はともにミガキ調整され、胎土には炭化物を微量に含む特徴があり、同一個体の可能性がある。



図Ⅲ-5 V層遺構・包含層出土土器



図Ⅲ-6 V層遺構出土石器

2. 剥片石器 (図Ⅲ-7-1~4 図版 5-4, 8-13~16)

V層包含層から出土した剥片石器は石鏃3点、エンド・スクレイパー1点の計4点で、全て図示した。

石鏃 (1~3)

1はA2b類に属する。尖頭部先端を欠き、基部の湾入は浅い。整形は表面全体と裏面縁辺部に施され、裏面は素材剥片の剥離面を広く残す。基部の湾入部と尖頭部側の縁辺に調整剥離が施されている。石材は遠軽町十勝石沢等で採取できる梨肌の黒曜石である。Va層出土ではあるものの、形態的には縄文前期の無茎三角鏃と思われる。2はA3b類に属する完形品。整形は表面全体と裏面の尖頭部と基部に調整剥離を施し、尖頭部中央に素材剥片の剥離面を残す。3はA4類に属する。尖頭部先端と柄部を欠いている。表面には入念な剥離調整、裏面には粗い剥離が施され、素材剥片の剥離面を残す。表面の尖頭部右側縁には欠損時の桶状剥離がある。

エンドスクレイパー (4)

B2類に属する刃部片。古い剥離面が残る素材端部に半円状の刃部が作出されている。表面の中央部から左側縁にかけての刃縁は裏面主剥離面に対し鈍角となっており、使用の結果、生じたと思われる微細剥離が連続している。また、折損面は複雑で不規則な多面を形成しており、被熱による折損の可能性がある。

3. 礫石器 (図Ⅲ-7-5~11 図版 5-5, 8-17~23)

V層包含層から出土した礫石器は石斧3点、たたき石5点、すり石・砥石各1点の計10点が出土し、そのうち7点を図示した。

石斧(5・6)

5はA1類に属する円刃片刃の完形品で、表裏面及び側面のほぼ全体に研磨調整が施され、光沢がある。表面には上端から胴部上半にかけて縦位の稜3本あり、その間には4面の研磨整形面がある。下半には縦10mm前後、横5～9mmの同様の面が3面みられる。裏面は表面ほど鮮明でないが縦位の稜が2条あり、研磨整形面が3面みられる。両側面には左上から右下に斜位の研磨整形痕がみられる。裏面の基端部には暗褐色部分があり、素材礫転礫の礫皮面の一部が残る。裏面の刃縁には使用痕と思われる直交する線條痕がみられることから横斧と考えられる。なお、刃縁より2mm幅は光沢強く残り、研磨調整の擦痕も少ないことから、最終的な使用は比較的軟質な対象物であった可能性がある。6はA5類に属する硬質な玄武岩製の斜刃両刃の刃部片である。両面の上半に素材礫の一部を残すもので、両側縁を主体に敲打調整を行っている。刃部表面の中央には使用により刃縁から破損したと思われる剥離がみられるが、その後、刃縁は研ぎ出しをしている。刃部裏面には刃縁に対し、45°前後の線條痕(斜傷)がみられることから縦斧と考えられる。

たたき石(7～9)

7はIB1類で、棒状礫の表裏面長軸上に浅い敲打痕があり、表面は全体の約2/3ほど、裏面は上下2ヵ所に敲打痕がある。8はIIA1類に属する。8.6m離れた地点間(I-4区、K-3区)で接合した。板状礫を用いたもので、表面の平坦面中央部に帯状に浅い粒状の敲打痕を有し、裏面は中央付近に浅い敲打痕がある。9はIIB1類に属する。不定形の塊状の礫片素材を用いたものと思われ、破断面稜はやや丸みをおび、敲打範囲が素材礫面の中央部にみられる。表面に1ヵ所、側面には複数単位のくぼむ敲打範囲を有する。いずれも個々の敲打の単位痕跡は見られないが、特に側面上部の大きな単位は挿鉢状にやや深く鋭角状にくぼんでいる。

すり石(10)

北海道式石冠の把握部の上端部片である。表面のほぼ全体に敲打整形が施されている。

砥石(11)

表面には2単位の砥面をもち、線條痕を残し、中央部がややくぼんでいる。左側の砥面は平坦で滑らかな使用面である。左側面には素材礫の転礫面を残し、裏面は層理面で剥落し、板状を呈する。

4. 礫

V層包含層から礫164点、試掘坑No.1・7から3点の167点が出土し、総重量7271.89gである。出土点数及び重量分布はVPB-01の位置するK-4区において18点、1626.28gと最も多く出土している。総じて調査区の東側が出土点数多く、重量も比例している。層位別ではVb層上位が48点、28.8%を占め、次いでVb層下位が38点、22.7%が続く。材質は厚真町内で容易に採集できる砂岩と泥岩の堆積岩が圧倒的主体を占める。被熱礫は2点のみで、J-5区のVb層上位と試掘坑No.1から出土している。(工藤)



図Ⅲ-7 V層包含層出土石器

表Ⅲ-1 V層遺構属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	平面形 調査面	調査面 層位	調査面規模(cm)		厚さ (cm)	長軸 方向	備考
						長軸	短軸			
Ⅲ-2	4-1・2	VF-01	K-4	不整形	VbU	31.5	22.0	5.0	N-13° -E	
Ⅲ-2	4-3・4	VF-02	J-4	不整形	VbM	47.0	36.5	5.0	N-56° -E	
Ⅲ-2	4-5・6	VF-03	K-4	不整形	VbU	39.5	37.0	10.0	N-69° -W	
Ⅲ-2	-	VCB-01	K-4	不整形	Va	121.5	49.5	3.0	N-14° -W	
Ⅲ-2	-	VCB-02	K-4	不整形	Va	48.0	32.5	3.0	N-13° -W	
Ⅲ-3	4-7・8 5-1	VPB-01	K-4	不整形	Va	334.0	142.0	-	N-37° -E	
Ⅲ-4	5-2・3	VFCB-01	I-5~7・J-5・6	不整形	Va~Vc	610.0	437.5	-	N-68° -W	

表Ⅲ-2 V層遺構・包含層出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	器形/ 部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-5-1	7-1	JP001 A	VC1	VPB-01	Va	18	深鉢/ 口縁~ 胴下半	平縁・やや内湾- 切り出し状 /やや外傾	無文帯・平行沈線文 ・RL斜行縄文 /RL斜行縄文-ミガキ	砂粒少量	成形時の 粘土帯幅 約7cm
Ⅲ-5-2	7-2	JP002 A	VC1	VPB- 01・K-4	Va	2	深鉢/ 胴下半	外傾	RL斜行縄文-無文 -剥落	砂粒中量	
Ⅲ-5-3	7-3	JP001 M	VC1	VCB-01	Va	1	深鉢/ 胴下半	やや外傾	剥落-ミガキ	砂粒中量	
Ⅲ-5-4	8-2	JP003 A	IB3	BTR-07	V	1	深鉢/ 胴下半	ほぼ直立	RL斜行縄文(自縄 自巻)・L燃糸文 ・微隆起線文-ナデ	砂粒少量	破断面 やや磨滅
Ⅲ-5-5	8-3	JP004 A	ⅢA1	K-3	VbL	1	深鉢/ 口縁	平縁・M状突起 ・外反-尖状	無文帯+RL縄線文 +突起頂部垂下の 貼付文剥落-ミガキ	砂粒・繊維 少量	
Ⅲ-5-6	8-4	JP005 A	ⅢA2	L-4	VbU	1	深鉢/ 口縁	平縁・三角形状肥厚 -尖状/外傾	貼付文(鋸歯状構成) +R燃糸圧痕文+無文帯 -ミガキ	砂粒・繊維 微量	
Ⅲ-5-7	8-5	JP007 A	VC1	J-4	Va	1	深鉢/ 胴上半	外傾	RL斜行縄文-ナデ	砂粒少量	
Ⅲ-5-8	8-6	JP008 A	VC1	BTR-01	V	1	深鉢/ 胴下半	外傾	RL斜行縄文+無文 -ナデ・炭化物付着	砂粒少量	
Ⅲ-5-9	8-7	JP009 A	VC1	BTR-01	V	1	深鉢/ 胴下半	外傾	LR斜行縄文 (縦走気味)-ナデ	砂粒中量	成形時の 粘土接合 で破断(内 傾接合)
Ⅲ-5-10	8-8	JP010 A	VC1	I-4	Va	1	深鉢/ 胴下半	外反	RL縄文 -ナデ・炭化物付着	砂粒少量	
Ⅲ-5-11	8-9	JP011 A	VC1	M-4	VbU	1	深鉢/ 胴下半	外傾	RL斜行縄文-ミガキ	砂粒・石英 少量	富良野 盆地系
Ⅲ-5-12	8-10	JP012 A	VC1	K-7	VbL	6	深鉢/ 底	やや外反 -隅丸角状 -突底	RL斜行縄文- 羽状RL縄文-ナデ	砂粒・石英 中量	富良野 盆地系
Ⅲ-5-13	8-11	JP013 A	VC1	J-4	Va	1	浅鉢/ 口縁	平縁- 切り出し状	R燃糸文+刻み -RL斜行縄文 (縦走気味)-ミガキ	砂粒微量	JP006Aと 同一個体 の可能性 有
Ⅲ-5-14	8-12	JP006 A	VC1	J-7	Va	1	浅鉢/ 胴上半	外傾	RL斜行縄文-ミガキ	砂粒微量	

表Ⅲ-3 V層遺構・包含層出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	遺構/ グリッド	層位	規模(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-6-1	7-4	-	1638	ポイント類	B2	BTR-07	-	(17.5)	(26.0)	(6.8)	(9.26)	Obs.	
Ⅲ-6-2	7-5	-	1611	R. F	-	VFCB-01	Vc	(31.0)	(26.7)	8.3	(5.05)	Obs.	赤井川産
Ⅲ-6-3	7-6	-	1397	U. F	-	VFCB-01	VbL	31.0	19.4	6.1	10.36	Obs.	
Ⅲ-6-4	7-7	VFC 001	221	フレイク	-	VFCB-01	Va	(35.6)	(15.9)	(8.8)	(4.49)	Obs.	2点接合
			911				VbL						
Ⅲ-6-5	7-8	VFC 002	547	フレイク	-	VFCB- 01	VbU	(32.5)	(26.4)	(4.9)	(2.38)	Obs.	3点接合
			719				VbL						
			1260				Vc						
Ⅲ-6-6	7-9	VFC 003	1136	フレイク	-	VFCB-01	Vc	(24.7)	(23.2)	(13.9)	(5.49)	Obs.	3点接合
			1451				Vc						
			1652				V						
Ⅲ-6-7	7-10	VST 001	1086	たたき石	I B2	I-6 BTR-07	Vc	76.0	38.2	21.5	74.3	Tu.	
			1636										
Ⅲ-7-1	8-13	-	949	石鏃	A2b	I-6	VbL	(11.9)	17.2	(1.9)	(0.41)	Obs.	梨肌・遠軽白滝産
Ⅲ-7-2	8-14	-	182	石鏃	A3b	K-5	VbU	24.5	13.1	2.8	0.72	Obs.	
Ⅲ-7-3	8-15	-	664	石鏃	A4	J-3	VbL	(15.0)	17.0	3.6	(0.87)	Obs.	
Ⅲ-7-4	8-16	-	1489	ナイフ・スクレイパー類	B2	K-4	VbL	(13.8)	(25.9)	(8.0)	(2.70)	Obs.	
Ⅲ-7-5	8-17	-	1519	石斧	A1	I-5	VbL	95.5	39.5	16.1	94.2	Gr-Mud.	片刃
Ⅲ-7-6	8-18	-	952	石斧	A5	K-6	VbM	(74.9)	62.2	30.3	(198.7)	Bs.	斜刃
Ⅲ-7-7	8-19	-	198	たたき石	I B1	K-3	Va	120.8	53.3	38.3	(315.0)	Sa.	
Ⅲ-7-8	8-20	VST 002	200	たたき石	II A1	K-3 I-4	VbU	135.5	65.4	17.0	215.0	Sa.	
			555										
Ⅲ-7-9	8-21	-	657	たたき石	II B1	J-3	VbU	88.4	73.8	56.3	375.0	Sa.	礫片素材
Ⅲ-7-10	8-22	-	820	すり石	D	I-7	VbU	(36.0)	(33.2)	(10.9)	(13.0)	Sa.	北海道式石冠
Ⅲ-7-11	8-23	-	661	砥石	-	J-3	VbM	(86.6)	(73.6)	(16.2)	(144.6)	Sa.	

表Ⅲ-4 VPB-01出土礫属性表

図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被 熱	材質	
					長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差						
-	-	435	Va	完形	60.0	-16.6	47.6	11.9	12.7	-10.9	1.3	-1.8	46.9	-	Sa.	
-	-	616	Va	略完形	57.9	-18.7	52.2	16.5	10.3	-13.3	1.1	-2.0	(41.4)	-	Sa.	
-	-	617	Va	完形	66.3	-10.3	45.2	9.5	7.0	-16.6	1.5	-1.6	21.4	-	Sa.	
-	VS 010	618 652	Va	完形	60.6	-16.0	36.1	0.4	11.7	-11.9	1.7	-1.4	31.5	-	Sa.	
-	-	619	Va	完形	41.3	-35.3	36.4	0.7	9.6	-14.0	1.1	-2.0	11.1	-	Mud.	
-	-	620	Va	完形	57.1	-19.5	33.2	-2.5	132.0	108.4	1.7	-1.4	36.5	-	Sa.	
-	-	621	Va	破片	(304.0)	227.4	(16.3)	19.4	(9.7)	-13.9	18.7	15.6	(6.2)	-	Sa.	
-	-	622	Va	破片	(35.9)	-40.7	(26.3)	-9.4	23.0	-0.6	1.4	-1.7	(13.1)	-	Mud.	
-	-	623	Va	完形	54.8	-21.8	40.4	4.7	11.7	-11.9	1.4	-1.7	20.0	-	Sa.	
-	-	641	VbU	破片	(28.3)	-48.3	(22.9)	-12.8	(8.5)	-15.1	1.2	-1.9	(66.1)	-	Sa.	
平均					76.6		35.7		23.6		3.1		29.4			
合計																294.2

表Ⅲ-5 V層グリッド別礫重量一覧表(遺構含む)

グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)	グリッド	重量(g)
I-3	343.08	J-3	225.72	K-3	757.71	L-3	38.72	M-3	38.28	BTR-01	19.76
I-4	94.33	J-4	176.87	K-4	1626.28	L-4	338.07	M-4	239.63	BTR-07	263.65
I-5	176.57	J-5	326.38	K-5	292.36	L-5	97.41	M-5	145.28	V層礫総重量(g)	
I-6	27.78	J-6	304.26	K-6	900.6	L-6	429.66	M-6	99.87		
I-7	0	J-7	92.69	K-7	196.42	L-7	12.09	M-7	8.42		

第Ⅳ章 ま と め

今回の調査で得られた成果と富里地区で近年調査された遺跡の成果を踏まえ、課題を整理し、まとめてみることにする。

1. 中世アイヌ文化期の焼土について

a 遺跡が所在する富里地区は、1858（安政 5）年旧暦の 6 月に松浦武四郎が第 6 回蝦夷地探検の際の宿泊地であり（松浦・吉田 1962、松浦・秋葉他 1985）、「トンニカ」と称するアイヌコタンがあったことが知られている（厚真村史 1956、町教委 2010b）。

2007（平成 19）年以降、当地区では厚幌導水路建設に伴いニタツプナイ遺跡、富里 1・2・3 遺跡が調査され、擦文文化期と近世アイヌ文化期の遺構、遺物が豊富に検出されている（町教委 2009・10b、道埋文 2016・18）。しかし、その間を埋める中世アイヌ文化期の遺構は当遺跡で検出した焼土 1 ヶ所のみであり、なぜ中世アイヌ文化期の遺構等が検出されないのか、当時の人々の動向が気になる。

b 高瀬氏の同定結果「厚真町富里 4 遺跡から出土した炭化種子」（第Ⅴ章第 3 節）では、「石狩低地帯よりも北・東側に多く分布し、「オホーツク文化の人々によって大陸から持ち込まれ、北海道内で継続的に栽培されていた」北方系短粒タイプのオオムギに触れている。

焼土（ⅢF-01）出土の短粒タイプのオオムギは、町内の複数の遺跡で中世アイヌ文化期には同タイプのオオムギが利用されているが、同時期の道内の他の地域での広がりや明確につかめていないという。「厚真町内で得られてきているデータの特殊性と普遍性を評価するために、北海道島内の他地域の状況を注視していく必要がある」と指摘している。

特に中世の遺跡を調査する際には、地道な作業であるフローテーションの実施による同類の炭化物種子等の検出に期待したい。

2. 縄文時代の土器集中について

a 土器集中出土の土器（図Ⅲ-5-1）は、当地区での出土としては初例となり、鍵層となるⅣ（Ta-c）層直下であるⅤa 層から出土している。土器は千歳市ママチ遺跡（道埋文 1983・87）を標式とし、Ⅲ（Ⅰ黒）層を主体とするママチⅢ群に相当する「平行沈線文土器」（道埋文 1987）の深鉢で、縄文時代晩期後葉に帰属する。

まさに本資料は Ta-c 降下直前のもので 1 個体ではあるが、ママチⅢ群土器を層位的に検討するうえでの好資料といえよう。

b 胎土に石英を含む富良野盆地系（町教委 2009）の土器（図Ⅲ-5-11・12）は、縄文時代晩期後葉に属し、当該期における当地方からの搬入品である。富良野盆地系土器の出土例は近隣での幌内 7 遺跡（町教委 2010a）において、縄文時代晩期中葉の土器からも報告されており、遠軽町白滝の八号沢露頭で採集される棒状原石 10 点（5 個体）がともに出土している。

搬入品の出土は、厚真川流域と道央、道東の広域圏との活発な物流の片鱗を物語るものである。（工藤）

第V章 自然科学的分析

第1節 厚真町富里4遺跡における放射性炭素年代測定(AMS測定)

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtavidze・三谷智広

1.はじめに

厚真町富里4遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2.試料と方法

試料は、富里4遺跡のⅢF-01から出土した炭化種実である。試料No.1(PLD-44705)は短粒のオオムギで、試料No.2(PLD-44706)はコナラ属である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44705	試料No.1 遺構:ⅢF-01 位置:K-3	種類:炭化種実(オオムギ短粒) 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-44706	試料No.2 遺構:ⅢF-01 位置:K-3	種類:炭化種実(コナラ属) 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)

3.結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号／種類	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-44705 試料No.1 オオムギ短粒	-24.50 ± 0.10	911 ± 20	910 ± 20	1048-1082 cal AD (38.68%)	1042-1087 cal AD (42.31%)
				1131-1138 cal AD (4.41%)	1091-1107 cal AD (5.59%)
				1151-1176 cal AD (22.00%)	1116-1181 cal AD (38.18%)
				1194-1200 cal AD (3.18%)	1186-1212 cal AD (9.37%)
PLD-44706 試料No.2 コナラ属	-25.15 ± 0.13	872 ± 20	870 ± 20	1168-1170 cal AD (3.21%)	1053-1061 cal AD (1.88%)
				1175-1196 cal AD (36.68%)	1067-1075 cal AD (1.24%)
				1198-1214 cal AD (28.38%)	1156-1222 cal AD (92.33%)

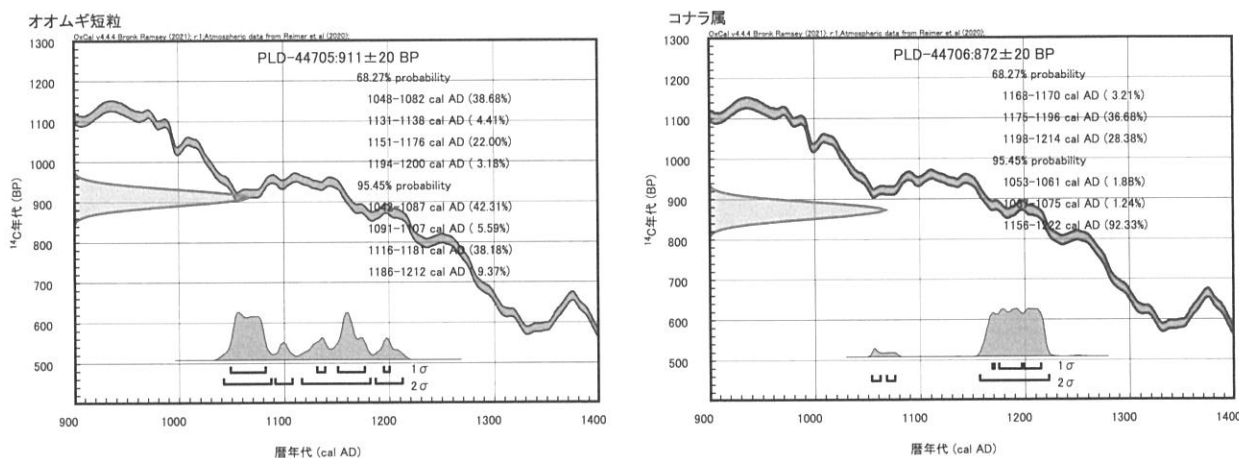


図 1 暦年較正結果

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果について、2σ 暦年代範囲（確率 95.45%）に着目してみると、試料 No.1 (PLD-44705) は、1042-1087 cal AD (42.31%)、1091-1107 cal AD (5.59%)、1116-1181 cal AD (38.18%)、1186-1212 cal AD (9.37%)の暦年代を示した。これは、擦文時代後期～中世アイヌ文化期に相当する。

試料 No.2 (PLD-44706) は、1053-1061 cal AD (1.88%)、1067-1075 cal AD (1.24%)、1156-1222 cal AD (92.33%)の暦年代を示した。これは、擦文時代後期～中世アイヌ文化期に相当する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」 : 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第2節 厚真町富里4遺跡の動物

札幌大学非常勤講師 高橋 理

遺跡の名称 富里4遺跡 (J-13-150)
遺跡の所在地 勇払郡厚真町字富里 373-1
発掘調査期間 2021年5月10日～6月11日
発掘調査面積 393.5 m²
発掘調査機関 厚真町教育委員会
発掘調査担当 工藤 肇・乾 哲也・奈良智法
遺跡の立地 厚真川中流域左岸 河岸段丘 (恵庭 a テフラ降下以降に離水)
検出遺構 近世～近代：柱穴／中世アイヌ文化期：焼土
縄文時代：焼土、土器集中、フレイク・チップ集中、炭化物集中

はじめに

令和3年度に実施された(仮称)北部地域防災拠点施設建設に伴う富里4遺跡の事前調査において、中世アイヌ文化期の焼土から魚類の焼骨が回収された。同定の機会を与えられた厚真町教育委員会各位に感謝いたします。

出土動物

対象とした動物は、中世アイヌ文化期の屋外炉(ⅢF-01)の1・2層から出土のコイ科魚類及びサケ科魚類であった。また、焼けた二枚貝の殻片が認められた。ⅢF-01の層位ごとの出土状況を表1に示している。

二枚貝綱 Pelecypoda
条鰭綱 Actinopterygii
 サケ目 Salmoniformes
 サケ科 Salmonidae
 サケ属 *Oncorhynchus*
 イトウ属 *Hucho*
 イトウ *Hucho perryi*?
 コイ目 Cypriniformes
 コイ科 Cyprinidae
鳥綱 Aves?
哺乳綱 Mammalia

コメント

貝類の殻片が1点認められた。肋の状態からマルスダレガイ科あるいはバカガイ科の貝類かと思われる。強く被熱して灰色化している。

サケ科魚類の出土は多くなかった。椎骨のほかは歯が1点であり、鰭棘の細片が含まれると

思われる。

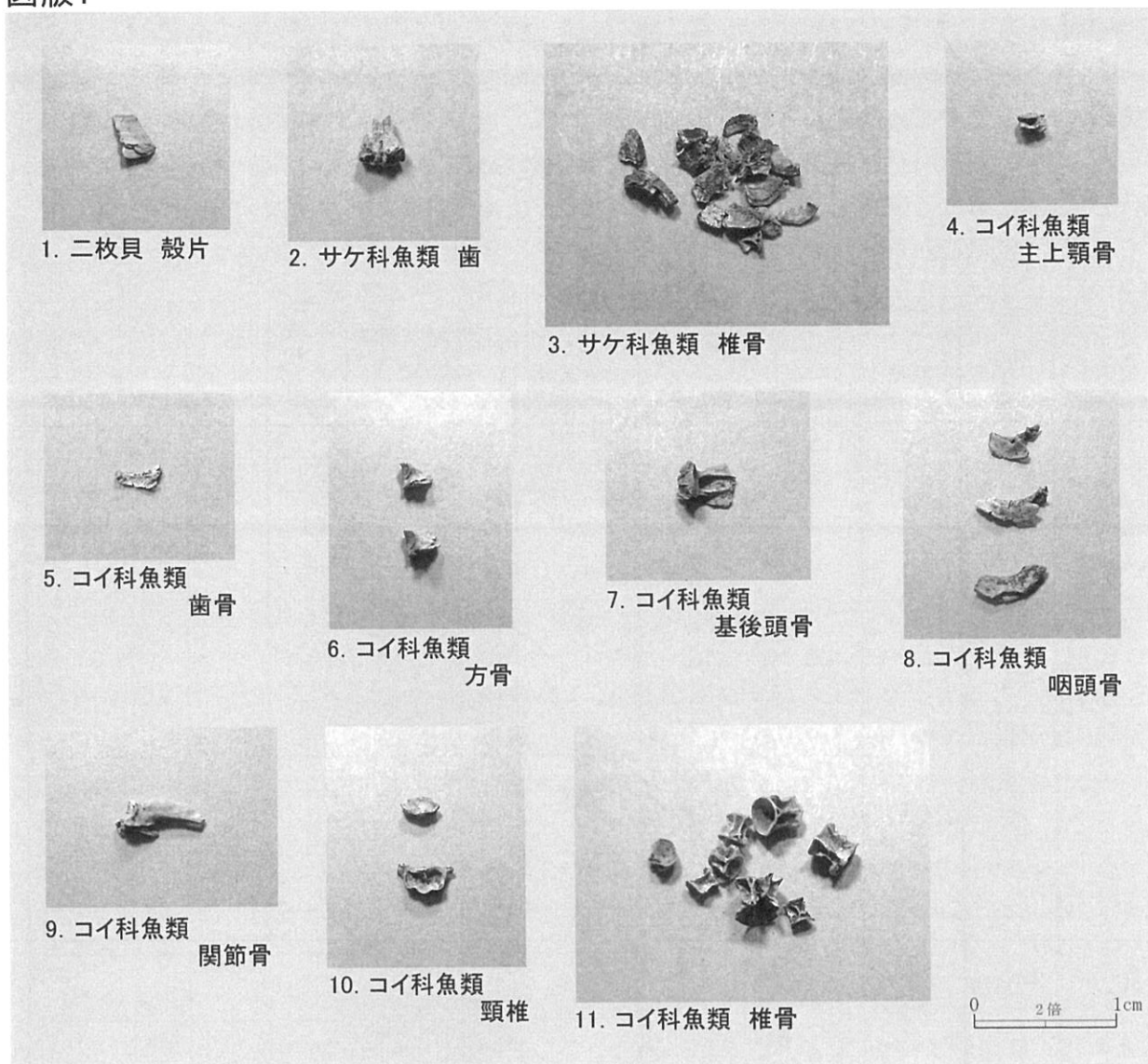
コイ科魚類はサケ科魚類よりはるかに多く出土した。また、椎骨だけでなく、頭骨一部（基後頭骨）、顎骨やそれに連結する骨（関節骨・方骨）、咽頭骨など頭胸部から中軸骨が残っていた。丁寧に解体されていること、屋外炉の出土であることなどから、送られた可能性もある。鳥類や哺乳類がごく少数出土した。シカやクマなどの大型のものは出土していない。

表1 厚真町富里4遺跡出土動物遺存体一覧表

:写真図版掲載試料

遺構名	遺構層位	時期	サンプル リング 層位	重量(g)		出土動物	部位	左右	数量	備考
					焼骨片					
III F-01	III bU	中世 アイヌ 文化期	1層	2.04	サケ科	椎骨			40	図版1-3
					イトウ?	椎骨			1	
					コイ科	椎骨			18	
						頸椎			5	図版1-10
						基後頭骨			1	図版1-7
						関節骨			1	図版1-9
						咽頭骨	左		5	図版1-8
						咽頭歯?			1	
						歯骨	左		1	図版1-5
					方骨	左		1		
					魚類	大型破片			6	
						鰭棘ほか			29	
						部位不明			365	
			鳥類?	脛骨? 遠位端一部?			1			
			2層	4.25	二枚貝	殻片			1	マルスダレガイ科? バカガイ科? 図版1-1
					サケ科	椎骨			37	
						歯			3	図版1-2
					コイ科	椎骨			69	図版1-11
						頸椎			13	
						主上顎骨	右		1	図版1-4
						関節骨			4	
						方骨	左 右		3 1	図版1-6
						咽頭骨			2	
						咽頭骨?	右		1	
					咽頭骨?			1		
					鯉条骨?			1		
コイ科?	肋骨					1				
魚類	歯骨	左		1						
	肋骨			5						
	鰭棘ほか			112						
	部位不明			1232						
哺乳類	部位不明			3						

図版1



第3節 厚真町富里4遺跡から出土した炭化種子

北海道大学大学院文学研究院 高瀬克範

1. 遺跡の概要

遺跡の名称 富里4遺跡 (J-13-150)
 遺跡の所在地 勇払郡厚真町字富里 373-1
 発掘調査期間 2021年5月10日～6月11日
 発掘調査機関 厚真町教育委員会
 発掘調査担当 工藤 肇・乾 哲也・奈良智法
 遺跡の立地 厚真川中流域左岸 河岸段丘 (恵庭 a テフラ降下以降に離水)
 検出遺構 縄文文化：焼土，土器集中，フレイク・チップ集中，炭化物集中；中世アイヌ文化期：焼土；中近世～近代：柱穴 (本稿で報告する種子はすべて中世アイヌ文化期)

2. 資料

本稿では、2021年度に実施された富里4遺跡の発掘調査で検出された炭化種子の同定結果を報告する。本遺跡では、縄文文化、中世アイヌ文化、中近世～近代までの遺構が検出され、縄文文化および中世アイヌ文化期の遺構から採取された土壌サンプルについてウォーター・フローテーション法による資料の選別が行われた。しかし、縄文文化の遺構からは炭化種子が出土しなかったため、ここで報告の対象となるのは中世アイヌ文化期から出土した炭化種子のみである。種子が出土した遺構は焼土 (ⅢF-01) であり、遺構中の1層 (黒褐色土層) とその直下の2層 (灰褐色土層) から採取された土壌中に炭化種子が含まれていた。いずれの層でも多数の魚骨が確認されているが、出土した炭化種子の量は多くはない。

なお、本稿にかかわる資料は2021年7月に報告者のもとに届いた。観察・記録をおこなったのち、2021年8月中に本報告とともにすべての資料を厚真町教育委員会へ返送した。

3. 出土種子 (表1)

アヲ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版 1-1 : ⅢF-01 (1層) 出土)

ⅢF-01の1層から1点のみが確認された。穎果はやや球形で、背面には果長の三分の二ほどの胚があり、その反対側の腹面には小さなへら形のへソが確認される (椿坂 1993)。ただし、本遺跡で確認された種子には内外穎が部分的に残存している。計測値は、図版 1-1 : L 1.59 × B 1.27 × T 1.05 (mm) である。

キビ *Panicum miliaceum* L. (図版 1-2 : ⅢF-01 (1層) 出土)

ⅢF-01の1層から1点のみが確認された。種子はやや球形または広卵形。背面には果長の二分の一ほどの胚があり、その反対側の腹面にはへら形状の大きなへソがある (椿坂 1993)。本遺跡で確認された種子は腹面側が大きく破損しているが、背面側に特徴的な胚が確認できる。計測値は、図版 1-2 : L (1.50) × B 1.60 × T (1.15) (mm) である (カッコ内は破損部分の計測値、以下同様)。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. (図版 1-3~7 : IIIF-01 (1層) 出土, ムギ類 : 図版 1-8 : IIIF-01 (1層) 出土)

IIIF-01 の 1 層から 9 点が確認された。果実は紡錘状楕円形、腹面中央には縦溝があり、背面はほぼ平らで基部に楕円形の胚があり果実の表面は粗面である。図版 1-3, 4, 5 はやや丸みを帯びており短粒タイプのオオムギであるが、図版 1-6 および 7 は保存状態が不良のため短粒か長粒かを明確に判定できない。本遺跡から出土した資料は被熱によるダメージが大きく、形態や表面の詳細な観察が難しい。オオムギとともにコムギ (*Triticum aestivum* L.) の可能性ものこされるもの(ムギ類)は、IIIF-01 の 1 層および 2 層から 2 点ずつ出土している(図版 1-8)。オオムギ、ムギ類に完形資料はなかったが、一応計測値を記しておくとの通りとなる。図版 1-3 : L (4.00) × B (3.00) × T (2.60) (mm), 図版 1-4 : L (4.45) × B (3.15) × T (2.70) (mm), 図版 1-5 : L (4.40) × B (3.90) × T (2.60) (mm), 図版 1-6 : L (4.00) × B (3.20) × T (2.50) (mm), 図版 1-7 : L (4.30) × B (3.00) × T (2.15) (mm), 図版 1-8 : L (2.50) × B (2.70) × T (2.30) (mm)である。

ブドウ科 VITIDACEAE (図版 1-9 : IIIF-01 (1層) 出土 ; 図版 1-10 : IIIF-01 (2層) 出土)

IIIF-01 の 1 層および 2 層から計 4 粒, 6 片が出土した。種子は広倒卵形。背面は丸みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜があり、稜の両側に針形の凹みがある。ブドウ属と同定され、エビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobate* (Regel) Nakai もしくはヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat と考えられる。北海道ではエビヅルの現在の分布が南部に限られることを考慮すると、後者である可能性が高い。計測値は、図版 1-8 : L 4.30 × B 3.30 × T 2.70 (mm), 図版 1-9 : L 3.90 × B 3.45 × T (2.20) (mm)である。

コナラ属 *Quercus* L. (図版 1-11 : IIIF-01 (1層) 出土)

IIIF-01 の 1 層から計 0.078g が出土した。出土した子葉は破片のため詳細な分類はできなかった。コナラ属にはミズナラ、コナラ、カシワなどがあるが、子葉の形態から詳細な分類をするのは困難である(吉崎・椿坂 2000)。いずれも細片のためサイズの計測はしておらず、表 1 には個数ではなく重量を掲示した。

不明 1 Unidentifiable 1 (図版 1-12, 13 : IIIF-01 (1層) 出土)

不明種子のうち、将来的に同定できる可能性があるが、手元に比較標本がないため同定できないものを「不明 1」とした。

不明 2 Unidentifiable 2 (図版 1-14, 15 : IIIF-01 (1層) 出土)

破損や被熱によるダメージによって保存状態が良好ではなかったことにより同定不能である資料を「不明 2」とした。サイズ、破損・発泡状態からみてオオムギ類果の小破片が多く含まれていると考えられ(図版 1-15)、サクラ属の可能性のある資料も 1 点ある(図版 1-14)。2 層出土資料には種子が抜け落ちた炭化果実の一部も 1 点含まれていたが、同定には至らなかった。

冬芽 Bud (図版 1-16 : IIIF-01 (1層) 出土)

IIIF-01 の 1 層から 4 点が確認された。冬芽は、枝との位置関係が確認でき、なおかつ冬芽全体が残存している場合は、科・属までの同定ができることもある。しかし、遺跡出土資料の場合は単体となった冬芽のみが検出されることが多く、詳細な分類が困難である。計測値は、図

版 1-16 : L 3.00 × B 1.40 × T 1.45 (mm)である。

4. コメント

富里4遺跡で確認された炭化種子は、量が少なく、多くが熱によるダメージを重度に受けているものであった。それでも、アワ、キビ、オオムギ、コムギ、ブドウ科、クルミ属、コナラ属といった分類群が確認された。こうした栽培種と野生種の構成は、厚真町内の遺跡で発見されてきている中世アイヌ文化期の種子のヴァリエーション内におさまっており、本遺跡でも類似した植物利用が行われていたと考えられる。

特筆されるべきは、丸みを帯びた短粒タイプのオオムギの穎果が多い点である。III F-01の1層から出土したオオムギ9点のうち、2点は長粒か短粒かの判断がつかなかったが、7点は短粒タイプであった。逆に、確実に長粒タイプと判断できる資料は確認されなかった。短粒タイプのオオムギは裸性のオオムギと考えられており(椿坂1998)、本州以南や北海道の石狩低地帯で一般的にみられる皮性の長粒タイプとは区別されている。北海道では石狩低地帯よりも北・東側に多く分布する短粒タイプのオオムギは、オホーツク文化の人々によって大陸から持ち込まれ、北海道内で継続的に栽培されていたと考えられている(山田1994, 1995, 2004, 山田・椿坂1995)。しかし、擦文後期以降になると石狩低地帯でも短粒タイプが出土する遺跡があらわれ(吉崎1989)、厚真町域においてはアイヌ文化期まで短粒タイプのオオムギが利用されていたことが明らかになってきている。これまでに、上幌内モイ(椿坂2007, 2009b)、オニキシベ4(椿坂2014)、上幌内2(椿坂2017)、ニタツプナイ(椿坂2009a)で擦文文化期に位置づけられる短粒タイプのオオムギが出土している。また、中・近世アイヌ文化期における短粒タイプのオオムギが厚幌1(吉崎・椿坂2004)、ニタツプナイ(椿坂2009a, 2010b)、上幌内モイ(椿坂2007, 2009b)、富里2(椿坂2010a)で確認されているほか、ヲチャラセナイ遺跡でも中世アイヌ文化期の住居炉跡から短粒タイプの可能性があるオオムギが出土している(椿坂2013)。本遺跡の調査成果によって、中世アイヌ文化期における短粒タイプのオオムギの利用を示す証拠がさらに増加したことになる。しかし、現段階においては、同時期の北海道のその他の地域における短粒タイプのオオムギのひろがりや明確につかめていない。厚真町内から得られてきているデータの特異性と普遍性を評価するために、北海道島内の他地域の状況を注視していく必要がある。

本稿の作成にあたって、椿坂恭代氏から多大なご協力と有益なご助言をいただいた。記して感謝申しあげる。

文献

椿坂恭代 1993「アワ・ヒエ・キビの同定」『先史時代と関連科学』, pp. 261-281, 吉崎昌一先生還暦記念論
集刊行会

椿坂恭代 1998「オオムギについて」石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編『道を辿る』, pp. 245-246

椿坂恭代 2007「上幌内モイ遺跡から検出された植物遺体の中間報告」『上幌内モイ遺跡(2)』, pp. 301-317,
厚真町教育委員会

椿坂恭代 2009a「厚真町ニタツプナイ遺跡から検出された炭化植物種子」『ニタツプナイ遺跡(1)』, pp. 265
-276, 厚真町教育委員会

椿坂恭代 2009b「上幌内モイ遺跡出土の植物種子について」『上幌内モイ遺跡(3) 第2分冊』, pp. 29-42,
厚真町教育委員会

椿坂恭代 2010a「厚真町富里2遺跡から検出された炭化植物種子」『幌内5遺跡(1) 富里2遺跡 ニタツプ
ナイ遺跡(2)』, pp. 292-296, 厚真町教育委員会

椿坂恭代 2010b「厚真町ニタツプナイ遺跡から検出された炭化植物種子」『幌内5遺跡(1) 富里2遺跡 ニ
タツプナイ遺跡(2)』, pp. 297-301, 厚真町教育委員会

椿坂恭代 2013「ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡から検出された植物種子」『ヲチャラセナイ
チャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡 第2分冊』, pp. 18-25, 厚真町教育委員会

椿坂恭代 2014「オニキシベ4遺跡出土の植物種子」『オニキシベ4遺跡』, pp. 220-227, 厚真町教育委員会

椿坂恭代 2017「厚真町上幌内2遺跡から検出された植物遺体」『上幌内2遺跡』, pp. 205-214, 厚真町教育
委員会。

山田悟郎 1994「ロシア沿海地方から出土する栽培植物について—ソバとオオムギを中心として—」『1993年
度北の歴史・文化交流研究事業中間報告』, pp. 29-50, 北海道開拓記念館

山田悟郎 1995「擦文時代の農耕について」『雄武堅穴群遺跡』, pp. 97-120, 北海道開拓記念館

山田悟郎 2004「擦文文化期における二系統のオオムギ」『宇田川洋先生華甲記念論文集 アイヌ文化の成立』,
pp. 133-142 頁, 北海道出版企画センター

山田悟郎・椿坂恭代 1995「大陸から伝播してきた栽培植物」『北の歴史・文化交流研究事業報告』, pp. 107-1032,
北海道開拓記念館

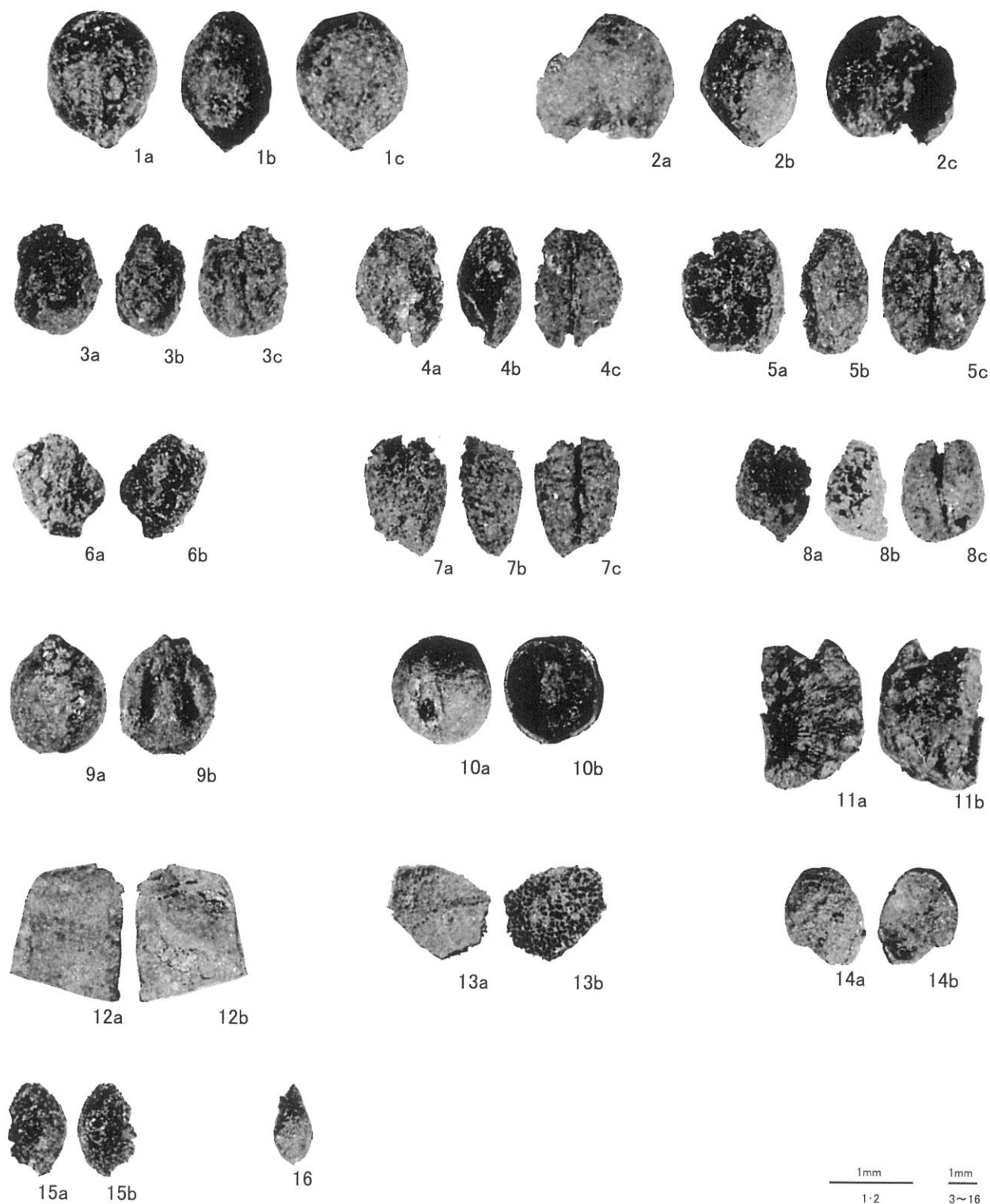
吉崎昌一 1989「K441遺跡北34条地点出土の植物種子」『K441遺跡北34条地点』, pp. 70-79, pp. 161-163,
札幌市教育委員会。

吉崎昌一・椿坂恭代 2004「北海道勇払郡厚幌1遺跡の植物種子」『厚幌1遺跡』, pp. 241-256, 厚真町教育
委員会

表1 富里4遺跡 炭化種子同定一覧表

遺構名	遺構層位	層位	文化	土壌サン プル容量 (ℓ)	アワ	キビ	オオ ムギ	ムギ 類	ブドウ科	コナ ラ属	不明 1	不明 2	冬芽	菌類	
					粒	粒	粒	粒	種子(粒) (片)	g	粒	片	片		
III F-01	III bU	1	中世アイヌ文化	8.0	1	1	9	2	3	4	0.08	4	22	4	1
III F-01	III bU	2	中世アイヌ文化	5.6				2	1	2			4		
		計		13.6	1	1	9	4	4	6	0.08	4	26	4	1

図版1



1:アワ 2:キビ 3~7:オオムギ 8:ムギ類 9・10:ブドウ科 11:コナラ属 12~15:不明 16:冬芽

引用・参考文献

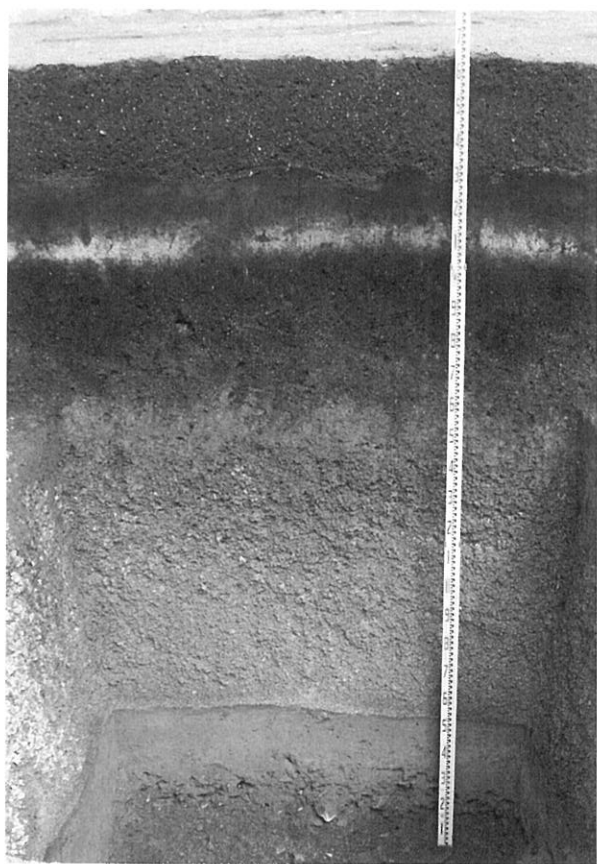
- 厚真町教育委員会 2004 厚幌1遺跡
- 厚真町教育委員会 2006 上幌内モイ遺跡(1)
- 厚真町教育委員会 2009 ニッタプナイ遺跡(1)
- 厚真町教育委員会 2010a 厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)
- 厚真町教育委員会 2010b 幌内5遺跡(1) 富里2遺跡 ニタツプナイ遺跡(2)
- 厚真町教育委員会 2015b ショロマ2遺跡
- 厚真町教育委員会 2020 幌内8遺跡
- 厚真町 1986 厚真町史
- 厚真町 1998 増補 厚真町史
- 厚真村 1956 厚真村史
- 厚真村郷土研究会 1962 厚真村古代史
- 宇田川 洋 1989 イオマンテの考古学 東京大学出版会
- 北海道同盟 1892 北海道志 上巻 北海道同盟著訳館
- 木村謙次 1799 蝦夷日記
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016 厚真町富里3遺跡 北埋調報326
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2018 厚真町豊沢5遺跡 富里1遺跡 豊沢10遺跡 豊丘2遺跡 北埋調報341
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1983 千歳市ママチ遺跡 北埋調報9
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987 千歳市ママチ遺跡Ⅲ 北埋調報36
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 厚真町浜厚真3遺跡 北埋調報186
- 佐原 真 1994 斧の文化史 東京大学出版会
- 土井重男 2012 中世近世東蝦夷地の諸相 鶴川3号
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1998 美沢東遺跡群
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002 苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ
- 松浦武四郎(解説 秋葉実他) 1985 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中 北海道出版企画センター
- 松浦武四郎(吉田常吉編) 1962 蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌 時事通信社
- 宮夫靖夫 1980 胆振東部に於ける貝殻文土器の新例について 北海道考古学16 北海道考古学会
- 山本融定 2009 コタンを訪ねて(八)～厚真川流域の人々～ 北海道の文化81 北海道文化財保護協会

富里4遺跡
写真図版

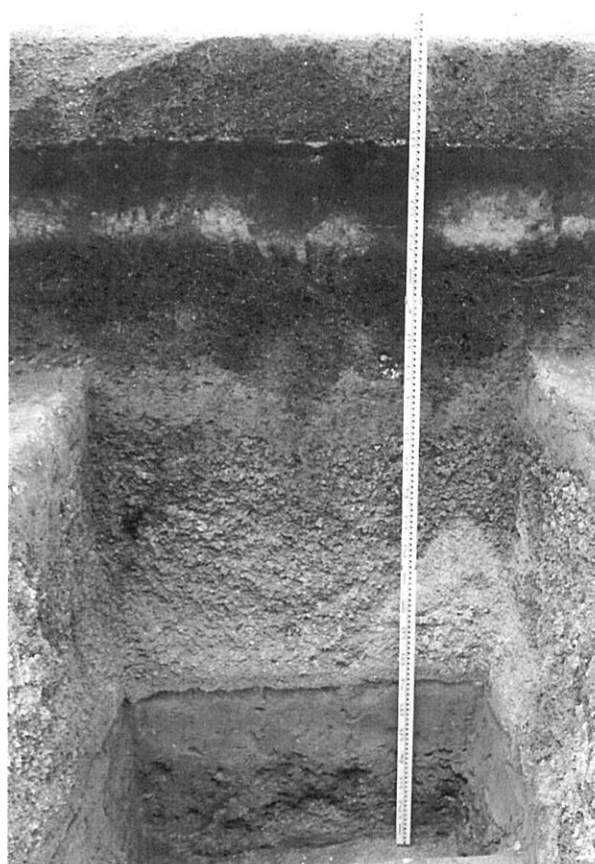
図版1



1. 調査前全景 S→



2. 旧石器トレンチ断面No.1 W→

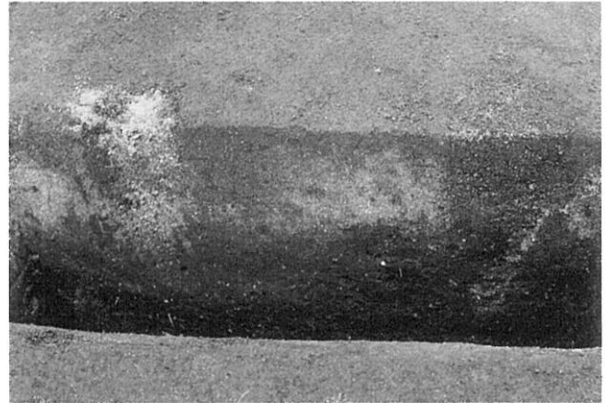


3. 旧石器トレンチ断面No.2 S→

図版2



1. OKP-01·02完掘 SW→



2. OKP-01·02断面 SW→



3. OKP-03完掘 W→



4. OKP-03断面 W→



5. OKP-04完掘 W→



6. OKP-04断面 W→



7. OKP-05完掘 W→



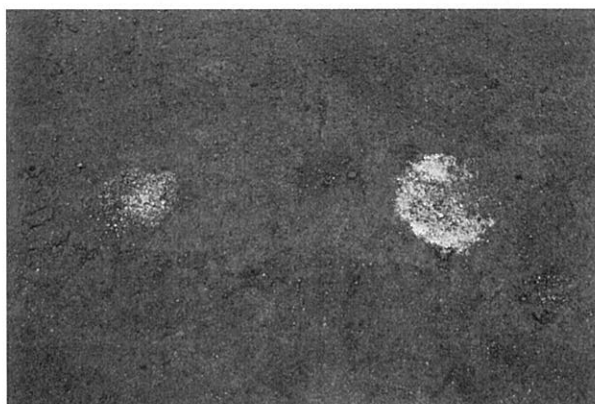
8. OKP-05断面 W→



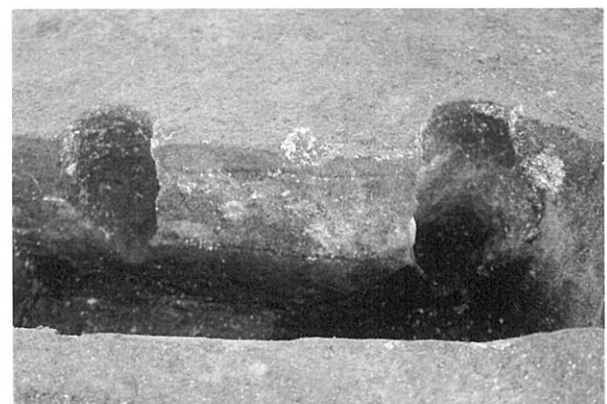
9. OKP-06完掘 W→



10. OKP-06断面 W→

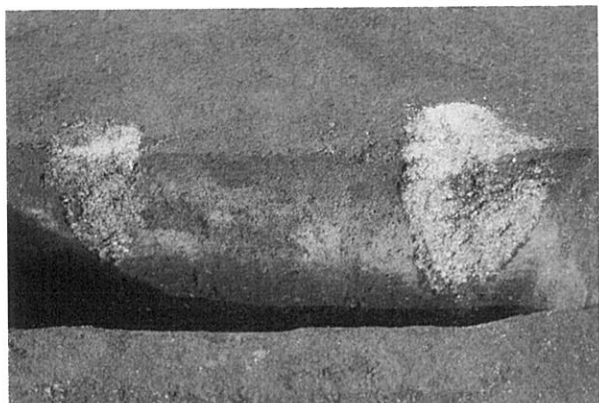


11. OKP-07·08検出 W→



12. OKP-07·08完掘 S→

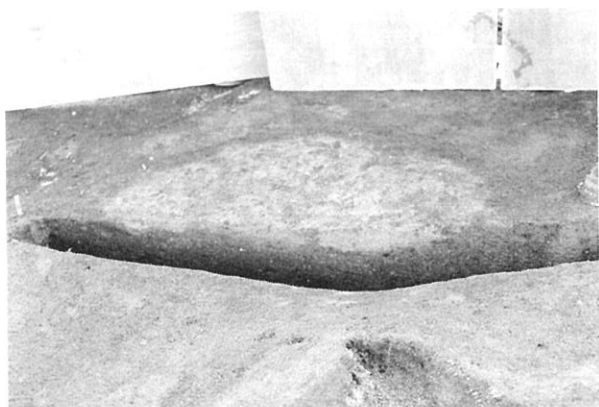
図版3



1. OKP-07・08断面 S→



2. ⅢF-01燃烧面断面 W→



3. ⅢF-01断面 W→

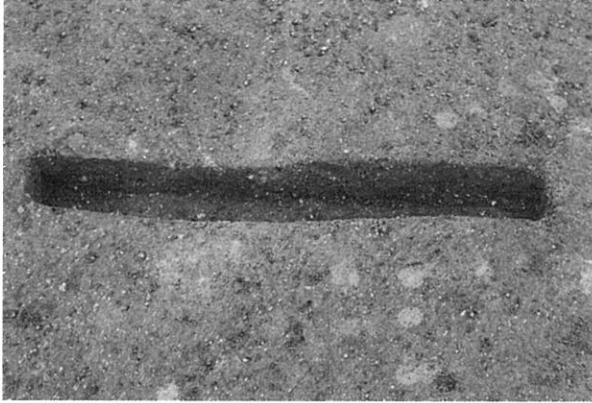


4. 調査状況(Ⅲ層) S→

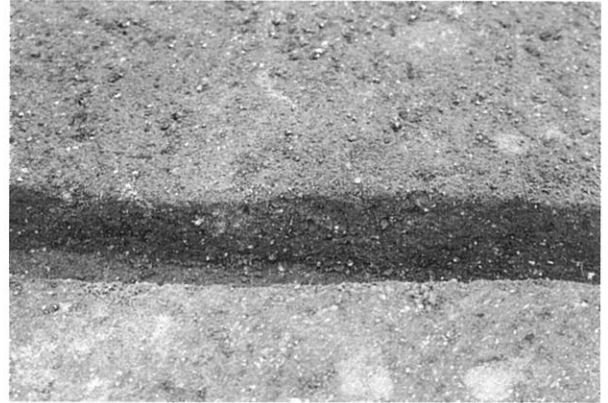


5. Ⅲ層完掘全景 NW→

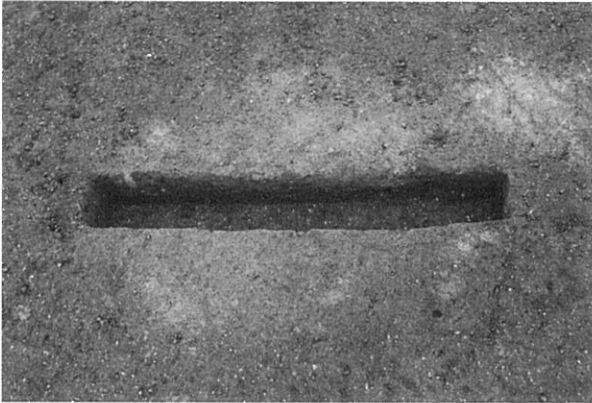
図版4



1. VF-01検出 S→



2. VF-01断面 S→



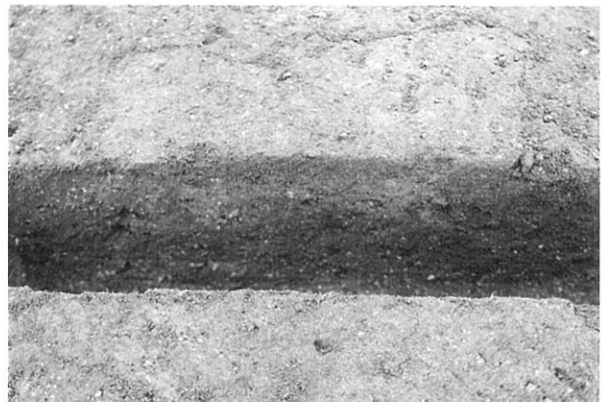
3. VF-02検出 SE→



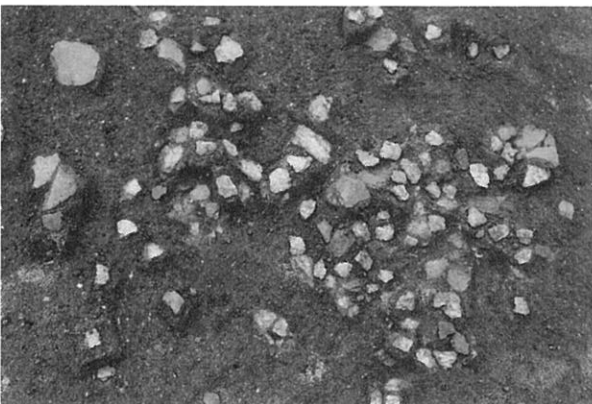
4. VF-02断面 SE→



5. VF-03検出 S→



6. VF-03断面 S→



7. VPB-01検出1 S→



8. VPB-01根穴完掘 S→

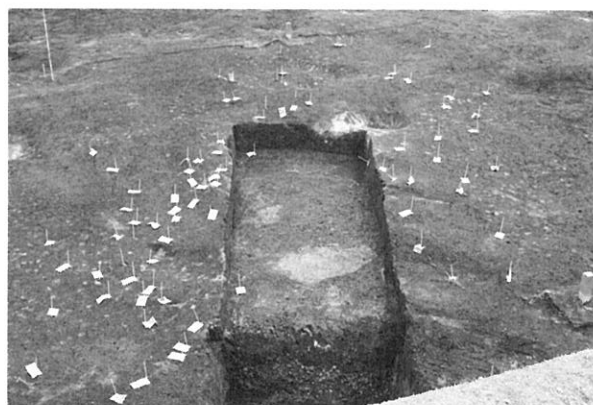
図版5



1. VPB-01検出2 S→



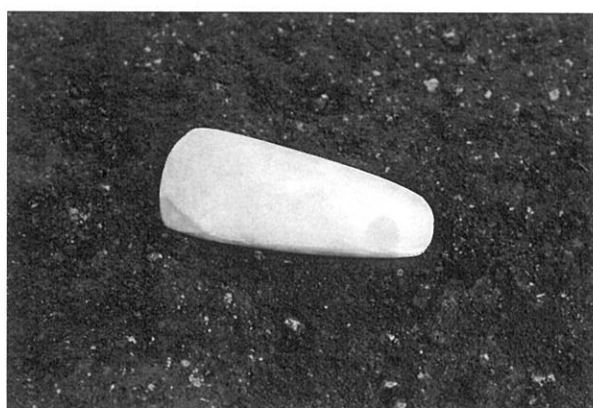
2. VFCB-01検出1 N→



3. VFCB-01検出2 W→



4. V層スクレイパー出土状態 E→



5. V層石斧出土状態 S→

図版6



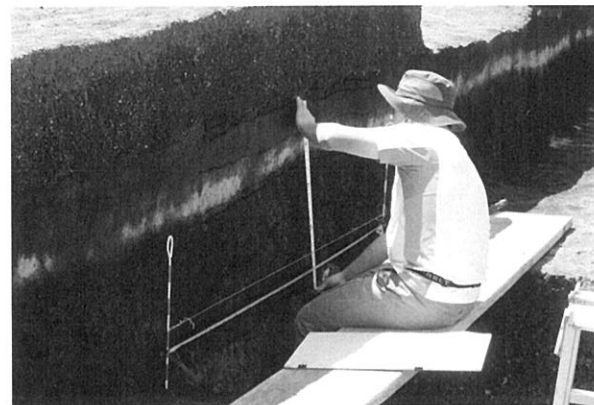
1. 調査状況1(旧石器) S→



2. 調査状況2(V層) S→



3. 調査状況3 S→

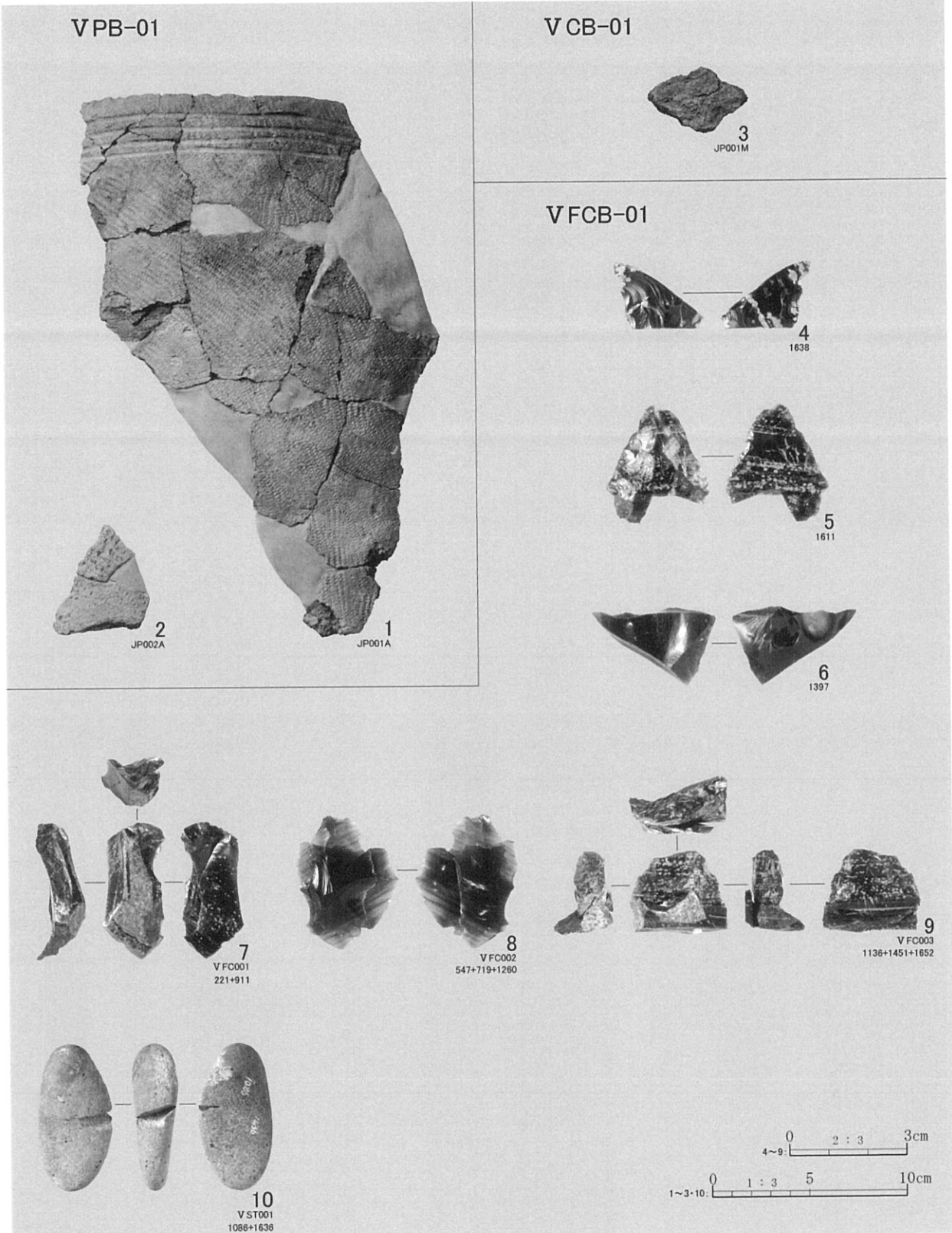


4. 調査状況(実測)4 N→



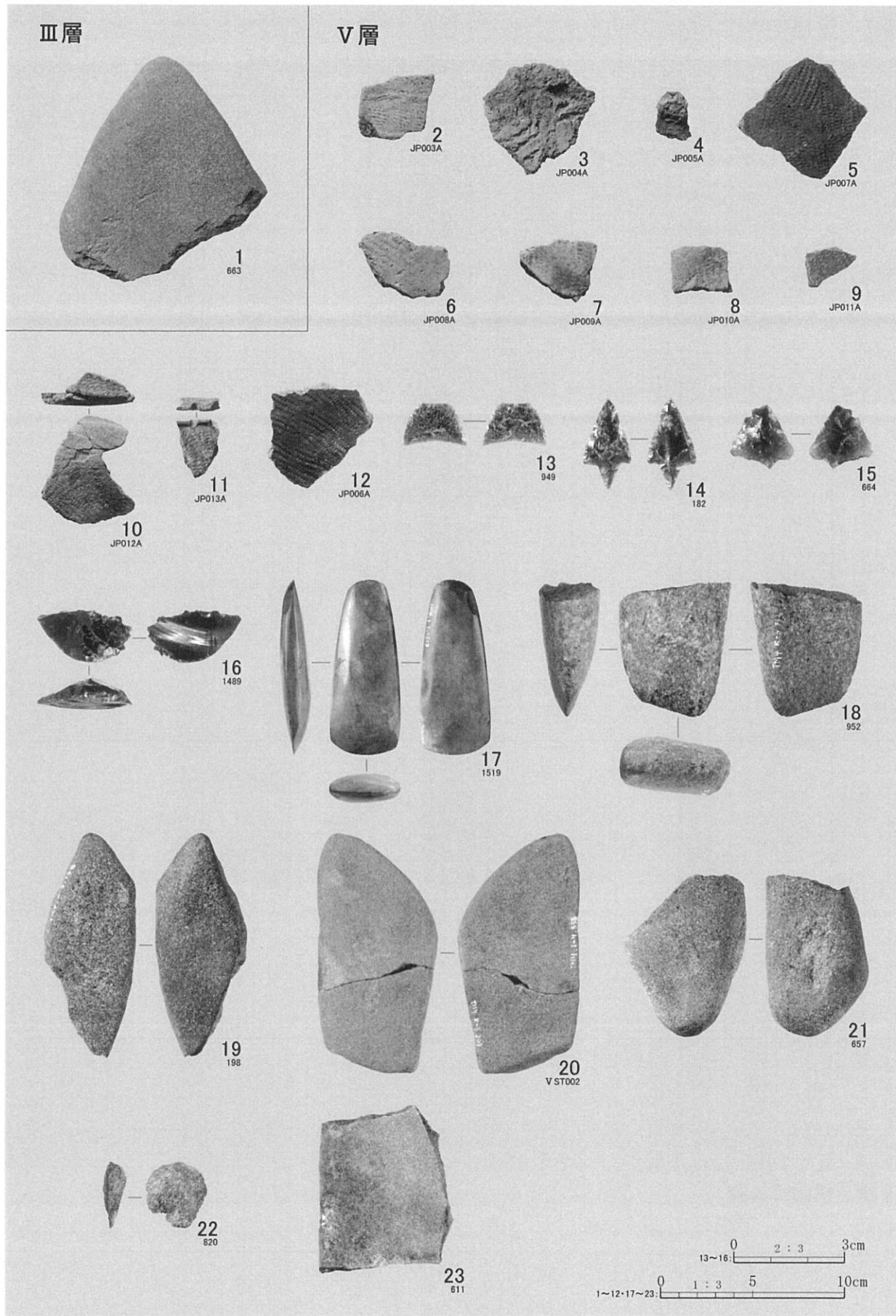
5. V層完掘空撮 NW→

図版7



V層遺構出土遺物

図版8



III・V層包含層出土遺物

報告書抄録	
ふりがな	あつまちょう とみさと4いせき
書名	厚真町 富里4遺跡
副書名	厚真町北部地域防災拠点施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	工藤 肇・乾 哲也・奈良智法
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1
発行機関	厚真町教育委員会
発行年月日	2022年 3月25日
ふりがな	とみさと4いせき
収録遺跡	富里4遺跡
所在地	勇払郡厚真町字富里373-1, 374-1
市町村コード	01581
遺跡番号	150
北緯	42° 45' 15"
東経	141° 58' 20"
調査期間	2021年5月10日～6月11日
調査面積	393.5㎡
調査原因	防災拠点施設建設事業
種別	
主な時代	近現代、中世アイヌ文化期、縄文時代早期・中期・晩期
主な遺構	近現代:杭跡8基、中世アイヌ文化期:焼土1ヵ所、縄文時代:焼土3ヵ所、炭化物集中2ヵ所、土器集中1ヵ所、フレイク・チップ集中1ヵ所
主な遺物	中世アイヌ文化期:礫石器・礫 縄文時代:土器・石器・フレイク・チップ・礫
要 約	
<p>厚真川左岸の標高約36mの段丘上に位置する。文化層は樽前bテフラ降下以前のⅢ層及び樽前c降下以前のⅤ層の2枚である。0層からは近現代の杭跡8基、Ⅲ層からは中世アイヌ文化期の焼土1ヵ所を検出した。Ⅴ層からは縄文時代晩期後葉のママチⅢ群に相当する土器集中1ヵ所、焼土3ヵ所、炭化物集中2ヵ所と前期～中期前半に属すると思われるフレイク・チップ集中1ヵ所を検出した。</p>	

厚真町 富里 4 遺跡

－厚真町防災設備整備事業 北部防災拠点施設建設

埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行日 令和 4 年 3 月 25 日

編集・発行 厚真町教育委員会

〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町 165 番地の 1

TEL (0145) - 27 - 2495 FAX (0145) - 27 - 3178

印刷 ひまわり印刷株式会社